2008年度 共同研究推進委員会報告書



監修責任者 推進委員会委員長 真栄城 勉 副委員長 佐久間 正夫 副委員長 里 井 洋一



目 次

附属学校との連携・地域貢献が求められる時代 共同研究推進委員会委員長 真栄城 勉

| I : | 学部·附属学 | 校共同研究的 | 推進部会 | 報告 | 副委員長 | 佐久間正え | 夫 | 1 |
|------|-------------|--------------|------------|---|---|---|---|--------|
| 1. | 学部·附属学校 | 艾共同研究推進委 | 美員会 通信 | 言集 | | | | |
| | 第1号 (2 | 008 年 6 月 13 | 目) | | | | | 2 |
| | 第 2 号 (2 | 2008年6月13 | 日) | | | | • | 3 |
| | 第 3 号 (2 | 2008年6月25 | 日) | | | | • | ···· 5 |
| | 第 4 号 (2 | 2008年7月10 | 日) | | • | | • | 7 |
| | 第 5 号 (2 | 2008年7月10 | 日) | | • | | • | g |
| | 第6号 (2 | 2008年7月24 | 日) | • | | • | | 10 |
| | | 2008年7月24 | . , | | | • | | |
| | 第8号 (2 | 2008年9月29 | 目) | | • | • | • | 14 |
| | 第9号 (2 | 2008年9月29 | | | | | | |
| | 第 10 号 (2 | 2008年10月16 | . , | | | | | |
| | | 2008年12月12 | . , | | | • | | |
| | | 2008年12月12 | | | | | | |
| | 第 13 号 (2 | 2009年5月7日 |]) | | • | • | | 23 |
| 2. | 各班の活動報告 | | | | | | | |
| | 数学教育教室 | 室班 | | | | | | |
| | 理科教育教室 | * | | | | | | |
| | 音楽教育教室 | * | | | | | | |
| | 生活科学教皇 | | | | | | | |
| | 技術教育教室 | 室班 | | • | | | • | 30 |
| | | | | | | | | |
| t II | 地域共同研究 | 推進部会報告 | ••••• | | | | | 32 |
| 1. | 2008 年度地域 | 共同研究推進部 | 会長報告 | 副委員 | 長里井 注 | 羊一 | | 33 |
| 2. | 平成 20 年度 N | IARAE ネット連携 | 馬事業活動 | の実績と | 評価 | | | 34 |
| 3. | はごろもネッ | ト連携事業活動 | 報告 | | • | ••••• | • | 40 |
| 4. | 平成 20 年度智 | 官古島圏域におけ | ける地域貢 | 献活動報 | 设告 | • | • | 46 |
| 5. | 竹富町教育委員 | 員会との共同研 | 究 | | | ••••• | • | 47 |
| 6. | 2008 年度島尻 | 教育研究所連携 | 事業活動 | 報告 | | • | | 53 |
| | | | | | | | | |
| 資料 1 | . 沖縄県・市町 | J村関係の各種委 | 美員一覧(| 平成 20 | 年度) … | • | | ··· 54 |
| | | | | | | | | |
| 資料 2 | 2. 平成 20 年度 | 5共同研究推進委 | 5員会名簿 | ••••• | | | | 58 |

附属学校との連携・地域貢献が求められる時代

共同研究推進委員会委員長 真栄城 勉

教育学部に「共同研究推進委員会」(平成 18 年)が設置されてから3年が経過しました。それまで設置されていた「琉球大学教育学部・附属学校共同研究規程」は廃止され、附属学校との共同研究にとどまらず、県および各市町村教育委員会等との連携及び共同研究の促進が求められるようになりました。大学が地域貢献を求められるようになった背景には、ローカル大学が地域に根付かないことには生き残れないという戦略を垣間みることができます。かって「大学教員の仕事は何か?」と問われれば、即座に「教育と研究です」といっていた時代が遠い世界のような気がします。いまは、教育+研究+地域貢献、それに進路(就職)指導+学部運営が加わってきて多忙な大学教員のイメージが出来上がりつつあるようです。

さて、平成 20 年度の共同研究推進委員会の報告書をここに発刊することを素直に喜びたいと思います。附属学校と教育学部との連携事業は、附属学校の授業研究会等の指導助言、教育実習生の研究授業等への指導助言、研究大会への参加、「教育実践研究」(教育実習事前・事後指導)への附属学校教諭の活用、学部の「教科教育法」等への活用等で相互の連携協力を促進してきました。平成 20 年度は、この中で附属学校の授業研究会への取り組みを佐久間正夫推進委員会副委員長(学部・附属学校共同研究推進部会長)が自ら「通信集」として長期にわたってニュースの編集・印刷・配布の責務を果たしてきました。委員長としてその責務に対して最大な謝意を表したいと思います。この通信内容をみる限り、多くの学部教員が附属学校に足を運び附属学校教諭の資質向上に大いに貢献したともいえます。研究大会への参加も含めて考えますと附属学校との距離がさらに近くなった感もあります。附属学校の廃止が、国会論議の的になって以来、附属学校廃止論は根強く生き延びており、大学財政が逼迫する中ではいつ台頭してきても不思議ではありません。本学部と附属学校の連携協力は、順調な展開をしていますが、さらに推進委員会の委員の先生方を中心に推進体制を盛り上げていくことが望まれるでしょう。

共同研究推進委員会には地域共同研究推進部会があり、その傘下に 5 つの WG (ワーキンググループ) があります。WG は、竹富町教育委員会 (平成 16 年 7 月)、那覇市教育委員会 (平成 17 年 1 月)、宮古島市教育委員会 (平成 18 年 5 月)、島尻教育研究所 (平成 19 年 4 月)、宜野湾市教育委員会 (平成 19 年 6 月)と教育学部が「連携・協力に関する協定書」を締結しています。それぞれの地域の教育課題についての調査研究や教職員の資質向上のための研修会への講師派遣、教育実践ボランティアの派遣事業、教育学部教育実習生の受け入れや学校紹介など多様な事業活動の連携・協力を展開しています。里井洋一副委員長(地域共同研究推進部会長)の指摘にもあるように、WG スタッフが推進委員会委員ではないということで委員会構成については、次年度検討課題として残されています。

両部会に関わった委員の先生方へ感謝すると同時に本報告書が本学部の地域貢献に関するエビデンスとして広く活用されることを期待して挨拶にかえます。

学部·附属学校共同研究推進部会報告

1. 学部 - 附属学校共同研究推進委員会 通信集

```
第1号 (6月13日)
第2号 (6月13日)
第3号 (6月25日)
第4号 (7月10日)
第5号 (7月24日)
第6号 (7月24日)
第7号 (9月29日)
第9号 (9月29日)
第11号 (12月12日)
第12号 (12月12日)
第13号 (5月7日)
```

2008年6月13日(金)第1号

今年度第1回目の教育学部共同研究推進委員会が、去る5月14日(水)、開催されました。 その議事要旨は、真栄城勉委員長より、委員各位に配信されています。改めて、その要点 を確認させていただきます。

①副委員長を提案どおり承認した。 佐久間正夫副委員長(学部・附属学校共同研究推進部会長) 里井洋一副委員長(地域貢献部会長)

②委員会組織の再編を、原案どおり承認した。

佐久間副委員長と里井副委員長は、ぜひ部会を招集して周知徹底を試み、<u>出来るところ</u>から積み重ねていただきたいと存じます。

共同研究推進部会設置の意図は、以下のとおりです。

- 1. 教育学部と附属学校の連携のあり方を外部から見て分かるようにする。
- 2. 附属小学校と附属中学校の連携強化を図る。
- 3. 学部の教科専門教員の関わりを深める。
- 4. 学部・附属学校連携実態のエヴィデンスを確保する。

特に、4. に関わりますが、共同研究推進部会の実施体制の一環として、「通信」による情報提供等を考えました。本来ならば、部会を招集し、こうした提案を諮らなければならないところですが、委員の皆さんにはご了解をお願いいたします。

【1】第3回公開授業研究会のお知らせ

附属中学校よりすでに、今年度の公開授業研究会の案内がなされています。今回は、第3回公開授業研究会のお知らせです。家政教育教室の皆さんを初め、ご都合のつく方々は、 附属中学校で授業参観をされてはいかがでしょうか。

- · 日 時…6月13日(金)15:00~15:50
- •場 所…附属中学校
- 教 科…家庭科
- 学 年…3 学年
- ·授業研究会…16:00~17:30

授業者:得能 留美子 先生

2008年6月13日(金)第2号

【1】第2回公開授業研究会参観記

附属中学校と学部からそれぞれ、授業参観記と授業研究会の感想等を寄せていただきま した。

- 日 時…5月23日(金)15:00~15:50
- 教 科…美術科
- ・学 年…1学年2組「色との出会い」

• 授業者…島筒 格 先生

《授業参観記》與那嶺 律子(琉大附属中)

本年度第2回目の公開授業は美術の基礎・基本である「色」がテーマの授業である。これは授業者島筒が生徒に色に関する基礎・基本をしっかり習得させ、またそれを生かした作品づくりをさせることを意図し、授業づくりに取り組んだものである。前時までには「色の基本要素」について学び、本時では4人グループでデジカメを使用し、「自然から色を見つけよう」ということで教室の外に飛び出した。

最初の10分は教室で行った。本校の職員はもとより大学の先生方、そして学生も多数見守る中、授業者から本時の目標や留意点、活動内容のポイントを押さえた説明があった。生徒が短時間で的確に学習内容を理解するために、工夫を凝らされた黒板の掲示物が目を引いた。その後、生徒が校内をグループで自由に活動しながら自然物の色を探し、カメラに収めていったが、参観者も1つのグループと共に行動しながらその様子を見取ったり、また複数のグループを回りながら全体的な生徒の様子を見取ったりしていた。生徒はグループのメンバーと相談しながら、同じ緑色でも微妙に違う色に気づいたり、自分たちがほしい色を探したり、一生懸命に取り組んでいた。その後、教室に戻り、観察したことをワークシートにまとめた後、2人の生徒に感じたことを発表してもらい、授業者の補足、そして次時には撮影した写真の鑑賞会をすることを確認して終わった。これから始まる生徒の作品づくりが楽しみな授業であった。

《授業参観記》上村 豊(学部:美術教育教室)

今回の美術科の公開授業「色との出会い」は、中学1年生を対象とした色彩に関する基礎的な授業である。特に身の周りの自然にある色を読み取り、感じ取る鑑賞体験を通して、 色についての基本的な理解を促し、関心や興味を喚起することを目標に掲げている。

公開日に行われていたのは、全6時間の内の3時間目の授業である。前の2時間で行った色の概念についての学習(3原色や色の3要素等について)と色相環見本の制作を受けて、この時間は、教室を出てグループで自由に校内を歩き回りながら、実際の事物の中にある色を観察し、ワークシートに従ってこれらの色についての情報を抽出し分析を加える作業を行った。具体的には、植物などの自然物を選び、デジタルカメラで撮影し、見つけた場所をワークシートに記入する。そしてその色を色相環見本と比較しながら色名を特定し、同じ色を混色で作り出す方法を考えるというものである。

この日は晴天に恵まれ、生徒たちは校内の様々な場所に出向いて、活発におしゃべりを しながら取材を行っていた。島筒先生は、それらのグループを見回りながら助言をしたり、 質問に答えたりして指導を行い、私達参観者も生徒たちと共に楽しく「色探し」に加わっ た。

授業時間が残り 10 分ほどになった所で教室に戻り、2・3 人の生徒による取材の感想や グループで観察した色についての発表を皆で聞いた後、個人用のワークシートに本時の活 動記録や感想を書かせ、カメラ、ワークシート類を回収して授業が終了した。

《授業研究会の感想等》與那嶺 律子(琉大附属中)

授業終了後、多目的室で授業研究会が行われた。本校職員3グループと専門教科(美術)のグループ計4グループに分かれ、今回の授業に対する感想、意見、疑問等を発表し合い、それぞれのグループでディスカッションが行われた。又本年度は授業研究会を通して、よりよい指導案づくりも検討していくことになっており、その項目、書き方についても検討がなされた。私が参加したグループでも本授業の良かったと思う点や、「外で生徒を一度集めて色の見方を説明した方が良かったのではないか」という方法に関する意見、また多数の疑問、質問点も出て、それに対して島筒先生は丁寧に、自分が意図したこと考えたことを説明していた。特に、今回は本授業の焦点が「基礎・基本の習得」にあり、その内容についての質疑応答や意見が活発に論議された。最後に教科グループから専門的な角度からの授業検討が報告され、専門教科ならではのこだわりが感じられるコメントが寄せられた。そして出席してくださった大学の先生を代表して、吉田・上村両先生から助言をいただいた。「色」をテーマにした授業の大切さ、そして難しさと、基礎・基本を教えた後につな

いた。「色」をテーマにした授業の大切さ、そして難しさと、基礎・基本を教えた後につながるものが見える授業、自分の表現したいものを表現することの大切さを感じた。

《授業研究会の感想等》上村 豊 (学部:美術教育教室)

公開授業後に行われた研究会には、嘉数校長以下、附属中学校の先生方に加え、助言者として、学部より小林(正)、奥田、吉田(悦)、上村の4名の教員と、今年度教育実習を行う美術教育専修3年次の学生5名が参加した。3つのグループに分かれての討論の後、それぞれから討論内容の発表、授業者の島筒先生への質疑、意見交換が行われた。

他教科の先生方のグループからは、美術教育において「色」あるいは「色彩」という課題の持つ意義や、実際の授業に取り入れる際の目標設定や評価基準に関する質問が多かったように思う。特に本時中は観察が中心で、取材した画像を皆で見る機会もなかったため、生徒達がどんな色を見つけ、それをどの様に感じ分析したのか目に見える形で確かめられなかったこと、また個々の体験や学習の成果をどの様に評価するのかなどの点について、疑問が呈された。

色彩は美術表現を構成する最も重要な要素の一つであり、特に絵画やデザインの分野では基礎から専門に至る教育課程全般にわたって取り扱われる課題である。題材名に示されるように、今回の授業はその最も初歩的な段階に位置づけられ、具体的な制作・表現というよりは、色というものがどの様にして成り立っているのか、その基本的な原理を、観察を通して理解することに焦点が当てられている。

島筒先生を囲んで教科専門の教員・学生が集まった私達のグループでは、このような題材のねらいを前提とした上で、授業の目標や手法について、もう少し踏み込んだ議論が行われた。特に、色彩現象の概念的な理解や混色技術の習得といったいわゆる「基礎・基本」的学習の成果を、どのように創造的表現に繋げて行くのかという、美術教育のより根本的な課題を巡って意見が交わされた。具体的には、色に対する意識調査を基にした生徒観、デジタルカメラを用いた取材方法、観察・表現対象の選択、色見本の活用方法、フィールドワークにおける生徒への課題意識の持たせ方など多岐にわたって検討を行った。

そもそも「色」には、科学的・分析的に捉えられる領域と、それだけに還元できない、 個人の主観や心理、またもっと広く社会や文化に関わる幅広い課題が含まれており、そこ にこそ美術表現で「色」を扱う面白さがあるはずである。

今回の公開授業や研究会を通じて、「色の教育」の奥深さ、難しさと面白さ、その可能性について、改めて実感を深めた。

2008年6月25日(水)第3号

第3回公開授業研究会が終わりました。

【1】第3回公開授業研究会

参観記

附属中学校と学部からそれぞれ、授業参観記と授業研究会の感想等を寄せていただきま した。

- 日 時…6月13日(金)15:00~15:50
- 教 科…家庭科
- 学 年…3 学年

. 授業者…得能 留美子 先生

《授業参観記》菊地 智裕 先生(琉大附属中)

生徒以上に教師が真剣になっていました(笑)。特に携帯電話のものは、生徒が集中して話し合い、教師が話をするときもしっかり聞けていた。とても身のある(教師にとっても)授業ありがとうございました。

授業を見て、指導案を見ながら感じたことは「家庭科は活用型の教科」ということでした。得能先生は、この授業を「活用」に位置づけていた。確かにすぐに活用できる場面を生徒が思い浮かべることができ、活用することができそうな内容だった。では「この内容に関する基礎・基本は何だったのだろう。生徒はその基礎・基本を活用しているのかな」と疑問が浮かんだ。多分、ここでの基礎・基本は指導案によると、対応の仕方や法律になってくるのだろう。特に、法律は、指導者を悪質商法から守ってくれるものである。だから、法律を理解することが、この題材では重要になると思われた。しかし、生徒の携帯に関する発表からは、法律のことは示されていなかったように思われた。だが、生徒は適切な答えをあげることができていた。このことから考えると、

- ① 生徒は基礎・基本をしっかり身につけているが、それを示す場面がわからず示していない。
- ② 生徒は本題材の学習前から、携帯電話の無料サイトなどについての対応を知っていた。 そのため、基礎・基本は特に理解していないが対処法などは分かっていた。

などがあげられる。どちらが今回の場合、当てはまるのかは分からなかった。

忙しい中、考えて下さった授業に対して、失礼なことを書いているかもしれないことを おわびします。今日はありがとうございました。

《授業研究会の感想等》花城 梨枝子 先生(学部:家政教育教室)

技術・家庭科(家庭分野)得能留美子先生の「消費者トラブルを解決しよう」を拝見した。附属の先生方以外にも、学部からは富士栄登美子先生と花城、公立学校の先生や学生も含めた大勢の参加であった。

授業は、出会い系サイトの不当請求についてのロールプレイで始まり、それへの対応を グループで討議し発表、それに対する外部講師(県民生活センター消費生活相談員)によ る解説、一般的な消費者トラブルへの対応という順で進んだ。内容が盛りだくさんであったために、時間が足りなかった状況はあるものの、たいへん刺激的な授業で勉強させて頂いた。

授業後の研究会で、消費生活相談員の「闇の世界が一般の消費者の生活にも迫っている」という発言が印象に残っている。つまり、以前ならトラブルが発生した場合、どう対応するかを消費者に具体的に説明していたが、最近では、「無視して下さい」と指導する事例も増えているとのこと。つまり、相手はまともな業者ではない闇の世界の人であり、そこと関わることによって、もし個人情報が漏れれば、さらに深刻な事態が発生する。恐ろしい世の中になったものだ。理科や数学のように、時代に関係なく基礎・基本が決まる教科もあろうが、生活者としての自立をめざす家庭科では、その自立に必要な知識やスキルが、生活を取り巻く状況によって変化する。今回、授業を行った学級では、約87%の生徒が携帯電話を持っており、その約33%で携帯電話にかかわる消費者トラブルを経験していた。生徒のおかれている状況が、すでに私たちの時代とは違う。実態に即した授業が求められるという意味で、最新情報を収集することの重要性を感じさせる授業であった。

《授業研究会の感想等》與那嶺 律子 先生(琉大附属中)

現在、社会で問題になっている「携帯電話の不正請求」と「アポイントメントセールス」の二つの事例を扱った授業。大人である私たちも他人事ではなく、授業研究会が始まってからもその事例の話が続いたほどです。今回は技術家庭科で一グループ、その他のグループは5教科の職員と技能4教科の職員を偏らずに組み合わせ3グループ作りました。(授業者の要望によるグループ分け)

私のグループは国語科、理科、養護教諭の組み合わせ。実生活に密着した授業づくりに感心する一方、授業の展開についてはいろいろな意見が出ました。特に授業後半は講師の説明が多く、生徒自身が思考し、活動する場面がほしかったという意見が出たり、また外部から招いた講師の現実の生の話を聴くことは、活動することと同じくらいの価値があったのではないかという意見等、「活用能力をはぐくむ」授業の在り方を考えさせる授業となりました。

5時からは各グループの報告の後、学部から参加下さった先生方から今の家庭科の授業 についてお話下さり、また消費者生活相談センターの小那覇さんからも社会の現状につい て貴重な話を聴くことができました。また今回は西崎中学校の職員も最後まで参加してく ださり、多様な意見の交換ができたのではないかと思います。

【2】第4回公開授業研究会のお知らせ

第4回公開授業研究会のお知らせです。社会科教育教室の皆さんを初め、ご都合のつく 方々は、附属中学校で授業参観をされてはいかがでしょうか。

- · 日 時…6月27日(金)15:00~15:50
- 場 所…附属中学校
- 教 科…社会科
- 学 年…2 学年
- 授業研究会…16:00~17:30

授業者:山内 治 先生

2008年7月10日(木)第4号

第4回公開授業研究会が終わりました。

【1】第4回公開授業研究会参観記

附属中学校と学部からそれぞれ、授業参観記と授業研究会の感想等を寄せていただきま した。

· 日 時···6月27日(金)15:00~15:50

・教 科…社会科「国会開設の歩み 自由民権運動」

• 学 年…2 学年

•授業者:山内 治 先生

《授業参観記》与那覇 周作 先生(琉大附属中:体育科)

山内先生、附属中での初の授業研お疲れ様でした。

教室掲示等にたくさん工夫があって、山内カラーがでていて感心しました。ベランダ等にも植物が育てられていてマイナスイオンのせいか落ち着いた教室だと感じました。

授業もさすがにベテランのうまさが随所に観られました。スラスラと歴史のストーリーをキーワードや人物を出してわかりやすく説明して生徒に考えさせる展開は「これぞ社会科のプロだ!」と思いました。本時の題材が日常生活においての「活用」となるとどうなるだろうか?と思いましたが、「風刺画」という教材を与えたことで、子どもたちはそれぞれ、その時代の自分が持っている知識を活用して社会背景を想像したり、仲間の意見を取り入れたりして思考する授業であったと思います。私自身は先生の授業を参観しながら同じ「風刺画」で現在の自分の身近な社会現象を当てはめると「ガソリン値上げ」と「道路建設」のやりとりが浮かびました。歴史は繰り返されるといいますが、子どもたちも史実の中から現在の自己の生きる社会現象にあてはめて考えたり、何かを切り拓く活用能力に結びつくのではないだろうか?と思いました。先生が「社会科の抱える課題」の中で「社会事象にかかわる知識を扱いながらも主体的な学習への態度や、各分野の特性に応じた見方・考え方・学び方を身につける授業展開が必要だ」と書いてあるように、そのような授業を仕組んで行くことが全体としてまとまりを持ち、記憶に頼る学習でなく、生徒が活用力や創造力(思考力・判断力)を高めるのだと思います。

とても示唆に富んだ授業だったと思います。ありがとうございました。

《授業参観記》小屋敷 琢己 先生(学部:島嶼文化教育教室)

6月27日に附属中学の公開授業へ参加しました。公開授業の内容は、山内治先生による 2年生歴史分野「国会開設の歩み 自由民権運動」でした。以下、簡単な感想です。

現行憲法の制定過程に関する研究で明らかになっていますが、これに多大な影響を与えた憲法学者である鈴木安蔵は、特に民権運動期の植木枝盛による憲法構想を参考にしたとされており、その意味でも、日本の近代を理解することは、とても大切なことだと思います。しかし、明治憲法の制定される以前の歴史的な状況や国会開設をめぐるさまざまな議論を、中学生に理解させることは、わずかな時間の制約のなかで、とても難しいことであると実感しました。

幕末維新の混乱のなかから芽生え、天下国家にたいして「建白」する気概に溢れた歴史上の人物が、ときには生命の危険を顧みず「人権」や「自由」を訴える姿に、いまの子どもたちがどのような感想をもつのか、そういうことも聞いてみたいと率直に思いました。また、授業でも紹介された「オッペケペー節」が、「演歌」の語源である「演説歌」であるけれど、「演歌」よりは、むしろいまの「ラップ」に近いものだと気づかされました。

《授業研究会の感想等》得能 留美子 先生 (琉大附属中:家庭科)

第4回目の公開授業は、社会科(歴史的分野)の授業であった。授業者は本年度附属中に赴任した山内で、活用をテーマに歴史的分野の授業に臨んでくれた。

社会科の抱える課題として山内は、教科書の記述的事項が試験のための知識にとどまるため、社会科嫌いが多いと分析し、今後は方法知を身につける授業を展開することが必要だと述べている。

そこで本時の授業「自由と民権を求めて」では、自由民権運動の風刺画から登場人物の セリフを個人から小グループ単位で話し合い、考えさせることで、そこから読み取れるも のや時代の空気のようなものを感じさせていくことを授業の視点においた展開であった。

授業の導入に現代の演歌と、演歌が誕生した 108 年前の演歌を聞き比べさせる等、工夫された教材に生徒はもちろんであるが、授業参観者までもが、授業の中に引き込まれ、関心を抱かせてくれた。授業終了後の研究会では、「指導案の項立てに対する質問(題材計画の必要性)」「生徒達が意見をまとめる際に参考にするキーワードがかなり高度な内容であった」また「本時の授業における基礎・基本と活用とは?」等活発な意見交換が交わされた。

本時の授業の大きなねらいとなるグループ間でのディスカッションが、6~7人のグループとなり、人数が多いために、それぞれが意見や考えを確かめ合ったり練りあうことができずにいたことが残念であった。授業内容も盛りだくさんで、グループの話し合い活動に時間を充分に、充てることができないでいた。

附属中の学習時におけるグループ活動(話し合い活動)では、効果的に話し合いを勧めるために、4人を単位とすることが多い。その授業実践を重ねてきた成果を赴任してきた職員へ共通確認することが不充分であったことが反省としてあげられる。もうすぐ夏休みにはいり、前期前半も終了するが、今後は指導案の内容の検討と、教科と本校がめざす(はぐくみたい)生徒像と活用能力についての検討が必要であると考える。

《授業研究会の感想等》山口 剛史 先生(学部:島嶼文化教育コース)

今回、山内治先生の「自由民権運動」の公開授業研究会に参加することができた。授業研究会まで参加することができたので、感想を含めて述べてみたい。本授業には、学部からは小屋敷琢己先生、佐久間正夫先生も参加され、公立中学校の先生、学部学生の参加もあった。

授業は明治期の自由民権運動がテーマで、当時の演説会の風刺画を読み取るという内容で、具体的作業としては「風刺画に描かれている登場人物(弁士、警察官、聴衆)のセリフを考える」というものであった。自由民権運動がおこった時代、集会条例により、演説内容を3日前までに警察に届けること、不適切な発言等があった場合には警察官はその集会を解散させることができるという時代であった。そのような中、人々は国会の開設を求め、また農民運動が展開し諸要求を求めて蜂起(秩父事件等)までおこり、帝国議会の設立、大日本帝国憲法の制定とつながっていく。このことを「時代の空気を読む」という作業を通じて豊かな歴史認識を創り上げようという試みであった(以下、第5号に続く)。

2008年7月10日(木)第5号

「時代の空気を読む」という点では、風刺画の内容を読み取っていくことで精一杯、つまり登場人物の発言の内容、意図を考えることに時間がかかり、当時の農民や士族層の不満の内容、生活苦などから出てくる憲法制定への願いや条文案などまで生徒自身が考えることはできなかった。この点は授業研究会においても、内容が盛りだくさんな部分であり、1時間で指導するということに無理もあるという意見も出された。

また、授業では、日本で最初の演歌ということで、川上音二郎の「オッペケペ節」の CD も流し、導入とした。この点は、ホンモノの教材としてもっと歌の意味とか活用できたのではという意見も出された。やはり「時代の空気を読む」という点でもこの歌の可能性は追求できるだろう。

授業作成にあたっては、社会科教育の里井洋一先生が一緒にユンタクし、授業をつくっていった。私自身も今後、社会科の先生方とともに勉強しながら秋の研究大会に参画したいと感じさせられた1日であった。

《授業参観雑感》佐久間 正夫(学部:教育学教室)

山内治先生の社会科(2 年生:「国会開設の歩み 自由民権運動」)の授業参観をさせていただいた。本日の授業内容におけるキーワードは、自由民権運動、民選議院設立建白書、国会期成同盟、川上音二郎、植木枝盛、自由党、立憲改進党、五日市憲法、秩父事件などである。江戸時代から明治時代へと、時代が大きく転換し、わが国は次第に、近代国家としての国の体制を整えていく。そうした過程で、「自由民権運動」なるものがどうして起こり、国会の開設がなぜ求められたのか。中学2年生にとっては、時代背景などがイメージしにくいであろうし、また、国会開設の歴史的な意味を、どれくらい認識できるであろうか。これは相当、難しい単元であると思われる。こんなに難解な内容を、かつて中学2年生の佐久間少年は、どのように学んで、どう理解したのか。

「明治維新は改革か、革命か、どちらかの立場にたって、論じなさい」前年度までの出題傾向とは打って変わった、大要、このような大学入試問題に出会った。哀れ、受験生佐久間は、ほとんど何も記述できず、試験時間中、自らの実力のなさを思い知らされたのであった。明治時代と聞くと、まず思い出されるのが、大学入試の時のこの苦い記憶である。

【2】第5回公開授業研究会のお知らせ

第5回公開授業研究会のお知らせです。英語教育教室の皆さんを初め、ご都合のつく方々は、附属中学校で授業参観をされてはいかがでしょうか。

- · 日 時···7月11日(金)15:00~15:50
- •場 所…附属中学校
- 教 科…英語科
- 学 年…3 学年
- ・ 授業研究会…16:00~17:30

授業者:島袋 訓子 先生

2008年7月24日(木)第6号

第5回公開授業研究会が終わりました。

【1】第5回公開授業研究会参観記

附属中学校における、夏季休業前の最後の公開授業研究会が行なわれました。附属中学校と学部からそれぞれ、授業参観記と授業研究会の感想等を寄せていただきました。

- · 日 時···7月11日(金)15:00~15:50
- · 教 科···英語科「SVO+how to~構文」
- 学 年…3 学年

·授業者:島袋 訓子 先生

《授業参観記》大城 朝広 先生 (琉大附属中:国語科)

訓子先生、お疲れ様でした。

弾丸 input から、とてもスピーディーでテンポのある授業でした。

自分は、ベランダ側の1番前のグループ(ちひろ、夏愛、裕太、(たぶん)築)にずっと付いて見ていたのですが、4人ともちゃんと指示を聞いていて、正直自分よりもやるべき事を理解していて、とても楽しく取り組んでいました。

反省会の中でも出ていましたが、今日学習した「how to~」を使って、周りの大人や、生徒同士に質問させる(例えば、「彼はサッカーができそうなので、Can you teach me ~」と質問する)などすれば、それは活用にもなるのではないだろうかとも思いました。今日の授業は、先生側が提示した例題を使って「how to~」を繰り返し繰り返し言う、習得の授業だったと思うので、後半のインタビューで、質問する人に合った質問事項を自分で考え「Excuse me. Can you teach me how to~」と使えるようになれば、それこそ日常生活に使える力となるのかなと思いました。「1時間の授業の中に習得と活用を入れることはできる」というようなことを市川先生もおっしゃっていましたが、こういうことなのかなと思いました。自分自身もとても勉強になりました。

毎日の生徒との奮闘、いろいろな行事等ある中での学級 PTS、そして夏休み前の忙しい時期の公開授業、ホントにお疲れ様でした。

《授業参観記》蔵藤 健雄 先生(学部:英語教育教室)

2008 年 7 月 11 日 3 時より、附属中学校 3 年 2 組において島袋訓子先生による英語の公開授業が行われた。参観者は、附属中学校教員に加え、学部教員、公立中学校教員、一般父母等、およそ 20 名であった。島袋先生は、この 4 月に附属中学校に赴任されたばかりで、おそらく慣れない環境であると思われるが、それにも関わらず、クラスを巧みにコントロールされ、classroom English を上手く用いて、テンポ良く授業が展開されていた。以下、授業全体の流れと簡単なコメントを述べる。

英語授業の定番である英語での挨拶に続いて、まずは、「弾丸インプット」と呼ばれる英語文丸暗記の訓練が行われた。この活動では、11の英文を1分間ですべて暗記し、ペアで一人が日本語を言い、もう一人はそれに対応する英語を言う。そして、正しく英文を言えれば、各文ごとに丸がもらえる。生徒は、短時間で集中してこの活動をこなしていたように見えた。

次に、本時のターゲットセンテンスである、Can you teach me how to \sim ? のパターンプラクティスが行われた。授業者は、大きく描かれた絵を用いて、Can you teach me how to play the guitar?等の表現を生徒から引き出し、それに対して、Yes, I can. I will teach you the next semester.等、適宜様々な表現を加えて、自然な会話を展開されていた。その後、約 20 分、スゴロクゲームを用いた活動が行われた。これは、4 人一グループになり、サイコロを振って出た目の数だけ進み、そこに描かれた絵を用いて、隣の生徒に、Can you teach me how to \sim ?と尋ね、Yes, I can.の答えを引き出せたらそこに留まれるが、No, I can't.の答えだと、2 つもどるというルールであった。ルール説明は主に日本語が用いられていたが、throw a dice、2 steps back 等、英語表現も用いられていた。ルール説明が十分でなかったのか、生徒は、スムーズに開始できていないように見えたが、一旦ルールが理解されると、ゲームを楽しんでいた。

続いて、約 10 分、ビンゴインタビューゲームが行われた。この活動では、あらかじめ send an e-mail、play the Okinawan shamisen、wear yukata、等、16 の動詞句が絵と共に 4x4 に配置されたビンゴシートが各生徒に配られた。生徒はその動詞句を用いて、クラスメイトに Can you teach me how to~? と尋ね、Yes の答えをもらったら絵の下にサインをもらい、縦、横、斜めのいずれか 2 列にサインがもらえればビンゴとなるルールであった。生徒は、クラスメイトだけでなく、授業参観者にも積極的に質問していた。

口頭訓練の後、さらに定着を計る目的で、Can you teach me how to ~?を用いた文を5つ、ビンゴシートの下に書いてみようというタスクが課せられたが、時間がなく、これは宿題となった。そして英語の挨拶で授業は終わった。

本時授業では、ターゲットセンテンスが何度も繰り返され生徒に十分定着したように思われる。ただし、やや残念なのは、Can you teach me how to~?のパターンしかなく、主語を変えたり、時制を変えたり、あるいは、教科書にも登場する tell や ask を使うようなバリエーションがあってもよかったのではないかと感じた。例えば、同じビンゴシートを用いるとしても、単に与えられた表現を Can you teach me how to~?に当てはめるのではなく、

A: "Do you know how to use a computer?"

B: "Yes, I can."

A: "Please tell/teach me how to use a computer."

B: "OK. Please come to my house next Sunday."

と言うように、Yes の答えを引き出せた場合でも、そこで終わりではなく、次の約束まで取り付けるところまでやる方が自然な会話である。あるいは、No の答えの場合は、

A: "Do you know how to use a computer?"

B: "I'm sorry, but I can't. Maybe you can ask Miki how to use a computer."

として、Aは次にMikiのところへ行く(行かねばならない)のようなルールにしてもおもしろいのではないだろうか。本時の活動内容で十分基本文型は定着できたと思われるので、今後は自然な会話を意識した応用練習を取り入れてもよいと感じた。

《授業研究会の感想等》赤嶺 睦子 先生(琉大附属中:英語科)

第5回の公開授業は、英語科の授業であった。授業者は本年度附属中に赴任した島袋で、 基礎・基本の習得と活用能力のはぐくむことの両方をめざした授業づくりに臨んでくれた。 評価交換、テニス県大会、三者面談と超多忙の中での授業公開であった。

英語科は英語を使えるようになる生徒を育てることを常日頃めざしている。しかし、いくら練習してもなかなか実際の言語使用場面で使えないという厳しい現状がある(以下、第7号に続く)。

2008年7月24日(金)第7号

さて、本時の授業は SVO + how to ~の英文を言わせる、書かせることをねらいとした授業であった。大きく、よく通る声で生徒を引きつけ、手作りの視聴覚教材やオリジナルのワークシートを綿密に準備し、生徒がペアや 4 人グループになって生き生きと活動に取り組む楽しい授業だった。本課の重要表現を 1 分間という時間制限の中でペアで練習していく弾丸 input、本時の目標としている構文をつかって絵を説明していくパターンプラクティス、その構文を使ったすごろくゲーム、インタビュウービンゴ、インタビューをもとに級友についての説明文を書く英作文活動がテンポ良く進んでいった。

授業終了後の研究会では、各学年職員から的を得た指摘、建設的な意見が出された。

繰り返し練習させることによって、目標としている構文を言ったり、書いたりさせるというねらいを達成させる活動であったが、自分の知りたいことを尋ねるための活動、自分の言いたいことを表現するよりコミュニカティブ活動も計画してほしいとの指摘もあった。

《授業研究会の感想等》大城 賢 先生(学部:英語教育教室)

公開授業に引き続き、授業研究会が行なわれた。授業研究会は金城聡副校長先生のユーモアに富んだ英語(?)の挨拶ではじまった。私を含め、蔵藤先生や、公立から参加された3人の先生も、やや緊張気味であったが、副校長のあいさつで、一気にリラックスすることができた。

授業研究会は、授業者(島袋訓子先生)の自評のあと、4 つの小グループに分かれて、本日の授業について、「本音トーク」を行った。私の参加したグループでは以下のような意見が出された。

- ・ペアによる「弾丸インプット」は、短時間で大量の練習ができるので基本文の定着には 効果的であった。
- ・双六ゲームは全員が熱中して取り組んでいて良かった。
- インタビューゲームも基本文を使ってよく言えていた。
- ・授業全体がドリル型になっていて、コミュニケーション活動とはほど遠かった。
- ・確かにゲームは楽しんでいるが、英語を話すことを楽しんでいたかというと、疑問が残った。
- ・ウォーミングアップは、天候や日時だけを聞くのではなく、先週末にどこへ行ったか、何をしたかなど、既習事項を使って、生徒と指導者が英語での対話などを行なってはどうか。
- ・双六ゲームはルールの説明が十分生徒に伝わっていなかった。「上がり」の後はどうするのか、説明もなかった。

私自身は、授業が単調ではなく、テンポよく進み、最初から最後まで、明るく和やかな雰囲気で進んだのは大変よかったと思う。練習が多いと、授業も単調になりがちだが、今回の授業では、生徒を飽きさせず、様々な活動を用意していたのがよかった。また、外国語を話す時は、常にプレッシャーがかかるものであるが、和やかな雰囲気は、生徒の「恥ずかしい」と思う気持ちを緩和してくれるものである。クラスの雰囲気づくりにも成功していたと思う。

検討事項としては、ドリル型の授業の限界についても考えておく必要があるという点である。教室で大量のドリルをしても、実際の場面になると、結局、英語が使えなかったと

いうことは、過去の英語教育の事例が示している。実際に英語が使えるようになるためには、実際の場面(またはそれに近い場面)で使ってみる必要がある。「使う」という体験を通して、あるいは、「使いながら」英語は習得していくものである。与えられた文を練習するドリル型から、英語を創造的に使用するコミュニカティブ型へと授業をシフトしていくことを、今後は検討して欲しいと思う。

《授業参観雑感》里井 洋一 先生(学部:社会科教育教室)

英語の専門ではない私(里井)は生徒になって授業をうけました。先生の表情に魅了され、先生と会話を交わせたらどんなにか幸せであろうかと思いました(残念なことに最後まで話しかける勇気を持てませんでした)。いつも附属中学校の英語の授業は楽しいのでその伝統の息づかいを今回も感じることができました。40年近く前に英語との出会いがありましたが、もし今、私が附属中学校にいたならばきっと私の人生は変わって外国語が大好きになっていたと思います。

残念なことに参観した私たちは双六に参加できませんでした。双六の中にしかけられた問いや子どもの問いにどう答えようかと考えている時、子どもは Yes No でやりすごすのをきいて、思考が中断し、次に行ってしまうのが残念でした。

そのこともあって、次のビンゴゲームではビンゴを成立させるために、行動をおこしていない中学生にねらいを定めてもっとも確実な問い(how to send an e-male)を発し、一つをクリアーしました。

その後は、全ての中学生が行動をおこしたので、見学にいらっしゃっていた先生方や御 父母の方々に問いかけました。たいへんご迷惑をおかけいたしましたが、おかげでビンゴ を一つ得ることができました。皆様方に厚く御礼申し上げます。

なお、否定的な答えをもらった後、OK、Thank you anyway。という答えが例文にあるので、その通りしゃべっていましたが、ともかく、ありがとう。という日本語訳しか思い当たらなかったので、実は失礼なことを言っているのではないかと不安な気持ちでした。そこで、Thank you anyway. を調べてみました。どうも、ありがとう。という日本語の「どうも」(よい答えは得られなかったがお世話になりました。後者が強調される「どうも」)という意味に近いようです。しかし、anyway(ともかくという反語の部分が強いように思えて)あまり納得できませんでした。皆様お教えいただければ幸いに存じます。

ともかく、上記のような思考ができたことがなにより充実した英語の授業でした。この授業環境を提供していただいた島袋訓子先生、ならびに附属中学校の先生方父母の皆様、そして一緒に参加した学部の先生方に感謝申し上げます。

《授業参観雑感》佐久間 正夫(学部:教育学教室)

今回の公開授業の参観を楽しみにしていた。中学・高校時代をとおして、英語は好きな教科であったからだ。中学の3年間、英語は同じ先生に担当していただいた。先生は、単元の基本文を初め、比較的細かな文法事項も教えてくださった。そのためであろうか。私には、英語を理詰め(英文法の論理)で理解しようとする姿勢が、強くあるように思われる。現行の学習指導要領(3時間/週)とは異なり、私の中学時代は、英語は1週当たり、5時間設定されていた。こうした事情により、文法の説明に十分、時間を割くことができたのかもしれない。また、毎授業時間、教科書の単元の英語のテープを聞く時間があり、英単語の発音や文の抑揚などにも注意を向けるようになった。

今回の公開授業では、文法の説明は何もなく、もっぱら、プラクティスの時間であった。こうした授業のやり方ももちろん、あると思う。しかし、私には、「生徒達は本日、どういう新しい知識を学んだのだろうか」との疑問が、最後まで残った。また、生徒達のプラクティスの際の発音を聞いていて、例えば、bambooや the Okinawan など、アクセントや th の発音などの細かな指導の蓄積こそが、「生きた英語」「使える英語」が身につく、最も近道なのではないかと思った。

2008年9月29日(月)第8号

【1】第6回公開授業研究会のお知らせ

日中は最高気温が 30 度以上になるなど、まだ真夏のような暑さが続いていますが、学部・附属学校の教員の皆さんは、教育・研究にご多忙な毎日を過ごされているかと思います。

さて、第6回公開授業研究会のお知らせです。数学教育教室の皆さんを初め、ご都合の つく方々は、附属中学校で授業参観をされてはいかがでしょうか。

• 日 時…9月29日(月)15:00~15:50

•場 所…附属中学校

• 教 科…数学科

• 学 年…3 学年

·授業研究会…16:00~17:30

授業者:比嘉 智也 先生

【2】附属小・中学校教育研究発表会のお知らせ

• 附属小学校: 11月22日(土)

附属中学校:11月8日(土)

今年度の学部・附属学校共同研究推進委員会は、下記の四点を目標(5/14 委員会決定) に、少しずつ出来るところから、共同研究の取り組みをサポートしてきました。

- 1. 教育学部と附属学校の連携のあり方を外部から見て分かるようにする。
- 2. 附属小学校と附属中学校の連携強化を図る。
- 3. 外部の教科専門教員の関わりを深める。
- 4. 学部・附属学校連携実態のエヴィデンスを確保する。

これまでは主に、4. に関わり、共同研究推進部会の実施体制の一環として、「通信」による公開授業の情報提供等を行なってきました。具体的には、附属中学校・学部教員のご協力により、公開授業研究会の案内や様子をお伝えしてきました。今後は、附属小学校とも連携し、同様の取り組みを行なっていく予定でいます(上記 2. に関わる内容)。

*学部・附属学校共同研究推進委員会に関するご意見、ご要望等々がありましたら、下記までご連絡をお願いいたします。

(連絡先:教育学教室:佐久間正夫:内線 8434: E-mail: msakuma@edu.u-ryukyu.ac.jp)

2008年9月29日(月)第9号

第6回公開授業研究会が終わりました。

【1】第6回公開授業研究会参観記

附属中学校における、夏季休業前の最後の公開授業研究会が行なわれました。附属中学校と学部からそれぞれ、授業参観記と授業研究会の感想等を寄せていただきました。

- · 日 時···9月29日(金)15:00~15:50
- 教 科…数学科「二次方程式-日常生活への応用①-」
- 学 年…3 学年

• 授業者: 比嘉 智也 先生

《授業参観記》山田 政由 先生(琉大附属中:技術科)

- ・今日気になったのは、日常生活とは何かというところ。
- ・個人によって日常は違うし、時期によっても違うと思う。
- ・花壇を作ることは日常的かよくわからないと思った。
- ・非日常的でも具体物を思い起こすような課題が良いのかと思った。
- ・現実的な問題をさせる時は実際の価格に近い物がよいと思う。教科書がそういうことを気にして作っているか気になる。
- ・教科の枠にとらわれないで解く方法もあるかもしれないが、教科担任制の中学校ではどうなのかと思う。総合的な学習の時間なら良いと思う。

《授業研究会の感想等》太田 薫 先生(琉大附属中:数学科)

今回は授業研究会での数学科の話し合いの中ででた授業へのコメントを載せてみました。 ①外間 郁生 先生(那覇市立真和志中学校)

公立の生徒と附属中学校の生徒の学ぶ意欲が違う。小学校でドリル学習など鍛えられてきたはずなのに、なぜなのか。学ぶことが楽しいような授業をすることが必要だと思う。 数学の授業に関しては条件として「レンガをつなげる。」という条件をつけるとよいのではと思う。

②湯澤 秀文 先生(教育学部:数学教育教室)

今日の授業は、方程式を使う問題としてみるならばみることはできるが、方程式を使うとやさしく解けるという問題ではなのではないか。授業の様子としては、子どもが解きたいという意欲が見られた。日常生活の問題を、「買うときにまけてと言わない。」「レンガをくっつけること。」などの条件をつけることをしながら数学の上にのせていく、数学化するということである。

③小田切 忠人 先生(教育学部:数学教育教室)

日常的に存在する方程式の問題はない、この問題は不等式の問題である。1400円の予算よりも、1500円、2000円の予算というほうが日常的である。また、壁に花壇はつけないので、花壇をコの字型には普通つくらない。普通は、長方形にする。日常の問題にすると、

解答がいろいろ出てくるのが普通である。日常に解ける問題で、学校で習うものをプラス するとよい。教科書のカリキュラムの中に活用能力を育てる授業を置かないで、カリキュ ラムの枠をとって、授業を考えていくとどうだろうか。方程式を解いて問題が解けるとい うことでなく、方程式にとらわれず、日常生活の中の問題をつくっていくのはどうか。 1時間の授業で、教師が多く介入するのではなくて、1時間課題を与えて、1時間発表会を する。それを教師が整理してあげるとよい。日常的に考えることからはじめればよい。教 科書の内容にしばられることなく,他の考え方を使っても解けるということをわかって展 開するとよい。

4)太田 薫(琉大附属中:数学科)

活用を意識した授業ということで、どのような課題を提示するか、十分練られた課題で あったと思う。条件をあまり出さないで,生徒に考えさせるような授業展開であった。生 徒は、意欲的にとり組んでおり、グループで話し合いながら早い時間でレンガの数87個を 出すことができた。実際には、算数までの知識で十分答えはだせるが、生徒は方程式をつ くってもつくらないでも解けるということを体験することで、数学のよさを感じるのでは ないかと思う。数学科として、活用能力を育てる授業を常に意識しているが、私自身は、 正直難しいと思う。これからも、数学科の職員、他教科の職員、大学の先生方の力もおか りしながら学んでいきたいと思う。比嘉先生、大変お疲れ様でした。勉強させていただき ありがとうございました。

《授業参観記及び授業研究会の感想等》湯澤 秀文先生(学部:数学教育教室)

本時の目標は、「日常生活の事象を筋道を立てて考えようとする。」「日常生活の事象に方 程式をどのように使うかを考えることができる。」で,授業は次のように展開された。導入 で授業者は「日常生活で方程式を利用するか?」と問いかけたが、予想通り(?)「利用し ない」に挙手した生徒が大半であった。本時の課題は「庭に長さ 20 cmのレンガで囲って, 花壇をつくりたい。予算は1400円。3個パックで50円と,5個パックで80円のレンガで, できるだけ広い花壇をつくるにはどうしたらよいか。」である。グループで探究活動を行う 中で、授業者が、与えられた条件の整理やはじめに求めること、購入できるレンガの個数、 などを問いかけ、全体で確認しながら進んだ。購入できるレンガの個数を求めるのが、本 時のメインの活動であった。ほとんどの生徒たちは電卓や筆算で試行錯誤し、グループで 相談しながら課題によく取り組んでいた。最後に、各グループの考えをホワイトボードに 書かせ、その中の代表的な2つの考えを全体に示し、買えるレンガの最大個数は87個であ ることを確認した(3個パックを4,5個パックを15買ったとき)。できるだけ大きな花壇を つくるにはどうしたらよいかについては、時間的な関係から、次時の課題とされた。

2. 授業研究会の概要

全体的な感想としては、生徒にとっても参観した教員にとっても、内容的には難しかっ たが楽しい授業であった、というものが多数であった。本時の学習課題については、日常 の問題を扱い、レンガの使い方などの条件を、敢えて詳しく指定していないため、多様な 考え方ができる。その分,解答者の価値観の入る余地が多く,この点に多くの疑問や質問 が出された。例えば、予算をちょうど使い切らなくてはいけないのか、レンガは割ったり、 離して使ったりしてはいけないのか、などである。特に、花壇の形については、様々な意 見が出された。常識的には、二次方程式の単元だから長方形だが、87個が4で割り切れな いため買い直しも考えるのか、レンガは五角形や円形などに並べてもよいのか、あるいは、 (以下、第10号に続く)

16

2008年10月16日(木)第10号

(第9号からの続き)

3 個のレンガで小さい三角形をつくり、それがその「外部を囲んでいる」とみなすのが最大ではないのか、そうした発想力を数学的な力と見るのか、などである。授業者の考えは、家の壁を花壇の一辺とし、87 個のレンガで残りの3辺を囲んだ、1辺がレンガ29 個分の正方形が最も広いというものであったが(ワークシートには家と庭の図がある)、壁を使うことの可否についても賛否両論であった。生徒の中では既に、壁を使う方法や円形に並べる方法なども出ていたようである。数学的観点としては、87 個が最大であることの論証が必要であることや、本時の内容は、方程式の利用といえばそうも見られるが、実質的には不等式(線形計画法)ではないか、といった意見が出された。こうした意見を踏まえ、本時の教材については方程式と切り離し、数学の活用や楽しさを目標にしてはどうか、その際は本当の日常を扱い、答えが整数値にならない方が広がりのあるよい問題となる、といった助言がなされた。また、それに関して海外のプロジェクト学習の実例も紹介された。なお、公立中学に勤務する元附属中学の先生のお話の中で、公立中学の学力対策や生徒たちの様子が報告され、深刻な実態があることについて深く考えさせられた。

3. 感想

単元にこだわらず、文字通り「数学する」ことの大切さは論を待たない。それと同時に、できればたった今指導しているこの単元を、日常生活の中にも位置づけたいという教員の気持ちもよくわかる。数学とは空気のようで、日常のいたるところに見出すことができ、そして日常生活を支えているが、それを生徒の学習状況や単元、授業時間等に合わせて教材化するとなると、なかなか開発が難しい。公立中学ではなおさらのことかもしれない。そうした中で今回の実践は、大変意味のある提案であり、問題提起であったと思う。

【参考】一般に、「(ある条件のもとで) 周を与えたとき、面積が最大の図形は何か」という問題は、(古典的) 等周問題といわれ、何と紀元前に考えられ、2 次元の場合の解が円、3 次元の場合の解が球であることも述べられている。厳密な証明は19世紀になって得られた。これの応用として「樋(とい)の問題」というのがあり、幅が一定のブリキ板で樋を作るとき、樋の受容力が最大であるのは、その直角断面が、曲線の場合は半円で、折れ線の場合は正多角形の一部であることが知られている。すると本時の場合、壁を使った1辺が29個のレンガの正方形の面積は29・29・20 cm・20 cm=33.64 ㎡だが、87個を(22+43+22)と分けて囲った長方形の面積は22・43・20 cm・20 cm=37.84 ㎡となり、正方形よりも大きい(これは、等周問題の応用としても解けるが、二次方程式の最大・最小問題としても解けるし、相加平均全相乗平均を利用しても解ける。ただし、整数値に関するチェックが必要)。さらに、87×20 cmという長さの"曲線"が許されるならば、壁に直径をもち、弧の部分の長さが87×20 cmという半円の花壇を考えれば、その半径は(87/ π)×20 cm =5.54mで、面積は約48.21 ㎡と、さらに大きくなる。ただしこの場合、半円の直径が約11mとなり、家の壁の長さ10mを超えてしまう。(文責:湯澤:数学教育教室)

※参加人数:27 名前後(内学部教員 4 名)

【2】第7回公開授業研究会のお知らせ

第7回公開授業研究会のお知らせです。音楽教育教室の皆さんを初め、ご都合のつく方々は、附属中学校で授業参観をされてはいかがでしょうか。

- 日 時···10 月 17 日 (金) 15:00~15:50
- •場 所…附属中学校
- 教 科…音楽科
- 学 年…3 学年
- ·授業研究会…16:00~17:30

授業者:新垣 頼子 先生

*学部・附属学校共同研究推進委員会に関するご意見、ご要望等々がありましたら、下記までご連絡をお願いいたします。

(連絡先:教育学教室:佐久間正夫:内線 8434: E-mail: msakuma@edu.u-ryukyu.ac.jp)

2008年12月12日(金)第11号

第7回公開授業研究会が終わりました。

第21回教育研究発表会も終了しました。

皆さん、お疲れさまでした!

【1】第7回公開授業研究会参観記

附属中学校における、音楽科の公開授業研究会が行なわれました。附属中学校と学部からそれぞれ、授業参観記と授業研究会の感想等を寄せていただきました。

- 日 時…10月17日(金)15:00~15:50
- ・ 教 科…音楽科「日本の音楽に親しもう 雅楽『越天楽』」
- 学 年…3年3組

·授業者:新垣 頼子 先生

参加者:24名(学部からは泉、シャイヤステ、津田の3先生が参加)

《授業参観記》島袋 訓子 先生(琉大附属中:英語科)

来月の研究発表会を目前にした 10 月 17 日 (金)、「日本の伝統音楽の管弦の音色や楽器に親しもう」を主題に新垣頼子先生による音楽の公開授業が行われました。

公開授業に引き続き授業研究会では、金城聡副校長先生の生徒の視点に立った面白い疑問の連発による挨拶で始まりました。「雅楽」という沖縄県民には馴染みの薄い分野の授業に多くの先生方が緊張気味であったが、一気にリラックスした雰囲気へと変わって行きました。

研究会では授業者の新垣頼子先生から、他の三学級はすでに本時の授業を終えており簡単そうに見えたので多少難易度を上げて今回の授業に臨んだということでありました。また。副校長先生持たれた疑問の次回生徒から質問されるのではないかとの予想も立てており、すでに答えも準備済みでありました。

授業者の自評後には各学年と音楽科の4つの班に分かれてのグループ討議が行われました。1年職員からは「楽器の絵のラミネート教材やワークシートの準備が良かった」「各楽器に対する意見を自分の言葉で表現できたのが素晴らしい」という意見や「クイズに時間をかけるより楽器の音を聞かせることに時間をかけたほうが良い」、「単独の楽器の音を聞かせどの楽器の音かを想像させる活動があってもよかった」等の意見があげられました。

2年職員からは、「私たち大人でも雅楽の楽器の音を聞き分けるのは難しかったが、生徒たちはよく聞き分けていた」という感想がありました。また、各自の教科と比較しての「音楽科の鑑賞の定義は何か」の質問には自称頼子先生の兄である○◇先生から音楽の鑑賞は国語でいうところの読解も含むというお答えがありました。その他には「雅楽の歴史も知

りたい」という意見もあり、今日の授業は生徒の興味関心を引いただけでなく、教師の側の興味関心も引き付けたのが話し合いの様子から窺えました。指導案に関しては、「指導観の中に生徒間が含まれていたのでは」という疑問もありました。

3 年職員からは「生徒に飽きさせずに雅楽を鑑賞させるために①どの順番で、②どの楽器が演奏されているかという活動は良かった」またその活動に入る前にビデオでの学期の音紹介があったのがその活動をスムーズにした」という意見と同時に「音の聞き分けは難しかった」、「主題の表示は明朝体のほうが見やすい」という資格に重点を置いた美術科ならではのアドバイスもありました。今回の授業『日本の伝統音楽雅楽の響きや音色に親しむ』、『楽器の種類や演奏形態に気を付けて聴く』ということを目標とするなら成功であった」音楽科の先生方に分かれた授業研究会が行われました。

最後に、音楽科の先生方からは「西洋音楽に偏る日本の音楽教育が、西洋音楽優位主義の教育をしているのではと思われる中よくぞ雅楽の授業をしてくれました。」という激励の言葉や、「多様な音楽を授業で取り入れることが音楽は縦列ではなく並列だということを教えてくれる」「日本には、西洋音楽より以前に生まれた日本独自の音楽があることを伝えられてよかった」等音楽科ならではの意見が多くありました。

また、今後の授業に対する指導助言として①生徒の視点、②授業参観者の視点、③純粋に音楽を楽しむ視点、の3点が挙げられました。まず、①自分が生徒だったら授業開始時の長い説明は嫌であるから、楽しく音から授業に入る工夫、②「どうして男性だけの演奏家?なぜ仏頂面で演奏するの?等生徒の考える不思議に対するやり取りをどう発展させるのか」が見える授業、③雅楽の面白さは音の重なり、拍節間、もしくは違和感等なのでそこが生徒に伝わる工夫のある授業展開、というように11月の発表会へ向けての貴重なアドバイスで今回の授業研究会が締めくくられました。

頼子先生、音楽科としての新しい分野への取り組みお疲れ様でした。雅楽への知識・関心が薄かった私たち職員へ「雅楽についてもっと知りたい」という学ぶ気持ちを起こしてくれた頼子先生に感謝です。また、中学生という多感な時期に「雅楽」に触れる機会を持った本校の生徒たちはしあわせです。これからも、お互いの授業研究会での率直な意見交換を通し、たがいに多くの生徒・教師の関心を高める授業作りを目指していきましょう。

《授業参観記及び授業研究会の感想等》津田 正之先生(学部:音楽教育教室)

1. 雅楽の鑑賞に挑戦した授業

雅楽「越天楽」はよく知られた鑑賞教材である。だが、生徒が普段耳にする音楽と離れた 非日常的な音楽であり、指導が難しい教材でもある。

改訂学習指導要領では、我が国の伝統音楽の指導をより重視する方向性が打ち出されている。新垣教諭によると、そのことを視野に入れた題材設定という。これからの教育の方向を見据え、あえて難しい教材に挑戦した意欲的な授業であった。

2. 授業の流れ

授業は次のような骨格で進められた。

- (1) 本時の目標「日本の伝統音楽の管絃の音色や楽器に親しもう」の確認し、ワークシートを配布。雅楽の演奏形態、管楽、舞楽、歌謡について知る。
- (2) 平長「音取」を DVD で鑑賞する。1 回目 前面に示された楽器の絵や楽器名を手がかりに、楽器を確認する。
- (3) 平長「音取」を DVD で鑑賞する。2 回目 音色の特徴をワークシートに書く。
- (4) グループ学習。ワークシートを見合いながら楽器の音色や特徴を確認する。
- (5) グループ学習。CD で鑑賞し、楽器の登場順に楽器の写真を置く。(第 12 号へ続く)

2008年12月12日(金)第12号

(第11号からの続き)

- (6) 楽器の順番を確認する。
- (7)「三管両絃三鼓」という演奏形態を知り、ワークシートに書く。(第12号へ続く)
- (8) 今日の感想を書く。

3. 授業についての意見

授業検討会は、授業者のコメント、グループで協議、指導助言の順で進められた。そこ で出された主な意見を示す。

・雅楽について生徒は様々な疑問をもっているのではないか。その疑問については調べてあるので、それを授業に生かしていきたい(授業者)/たっぷりと時間をかけて、ゆったりとした授業であった/記述しやすいワークシートの工夫が必要/生徒はよく聴き分けようとしていたが、正直、楽器の音色の違いは聴き取りにくい。それがグループ活動の停滞につながったのではないか/国語でいう鑑賞と音楽でいう鑑賞ではどう違うのか/評価の観点が評価の方法になっている。/指導観の記述が生徒観になっている/楽しむためには何回も聴かせることが必要/一つの楽器を流して確認させてもよかった/音を自由に聴かせてから、楽器の学習に入ってもよかったのではないか/本物の楽器が一つでも提示できたらよかった/etc.

4. 記録者のコメント

教材・教具がよく準備され、また具体的な手だても工夫された授業であった。こうした 点を評価しつつ、今後の課題として2点、指摘したい。

第一は、学習者意識を強くもつことである。とくに教材をつくる際、自分が生徒だったら身を乗り出して楽しく学ぶことができるかという視点から見つめ直すことである。とくに非日常的な音楽を指導する場合、この視点は重要となる。残念ながら今回の授業は「えーっそうか」「なるほど」「面白い」というつぶやきが出るようなワクワク感のある授業であったとは言い難い。加えて、説明も冗長の感が否めなかった。もっと精査の必要がある。

第二は、教材研究を深めることである。雅楽「越天楽」の音楽的なよさや面白さは何なのか、それは音楽を形づくっている要素のどの部分の働きに特徴付けられるのか、という点について研究を深めることである。この点が不明瞭なままでは、生徒にとって非日常の音楽である雅楽の魅力に接近させるのは難しい。教師が生徒に教えたい何かを明確にすることが、学習者意識にたってどのような手だてを講じるべきかという第一の視点を深める前提となる。楽器の音色に加え、テクスチュア(音の重なり方)、非拍節的ではないリズムなどがその手がかりとなろう。

公開研究会では、ゲストティーチャーを招いた授業を計画しているという。声楽の泉惠 得氏と箏の専門家、日高貞子氏とのコラボレーションで「荒城の月」を演奏すると聴いて いる。これは、教育学部との協力・連携事業の一つととらえることができる。

伝統音楽学習では、ゲストティーチャーの活用も今日的な課題である。プロの演奏を授業にどう活用するのかについて、貴重な問題提起が期待できるであろう。最後になったが、有益な授業を公開して下さった授業者の新垣頼子先生に心から謝意を表したい(文責:津田正之:音楽教育教室)



※なお、附属中学校の島袋訓子先生(與那嶺律子先生より原稿を送付していただきました) と、学部の津田正之先生からは、早くに原稿をいただいていましたが、担当者(佐久間) の種々の事情により、「通信」発行が、大幅に遅れました。この場をお借りして、お詫びを 申し上げます。

【2】第8回公開授業研究会のお知らせ

第8回公開授業研究会のお知らせです。国語教育教室の皆さんを初め、ご都合のつく方々は、附属中学校で授業参観をされてはいかがでしょうか。

- · 日 時···12月12日(金)15:00~15:50
- •場 所…附属中学校
- 教 科…国語科
- 学 年…1 学年
- · 授業研究会…16:00~17:30

授業者:与那覇 直樹 先生

*学部・附属学校共同研究推進委員会に関するご意見、ご要望等々がありましたら、下記までご連絡をお願いいたします。

(連絡先:教育学教室:佐久間正夫:内線 8434: E-mail: msakuma@edu.u-ryukyu.ac.jp)

2009年5月7日(月)第13号(最終号)第8回公開授業研究会が終わりました。

【1】第8回公開授業研究会参観記

附属中学校において、第8回公開授業研究会が行なわれました。学部から、授業参観記を寄せていただきました。

なお、本公開授業研究会終了直後に、萩野先生より授業参観記をいただいていましたが、 担当者(佐久間)の事情により、通信の発行がなされないまま、今日まで来てしまいました。お詫びいたします。

• 日 時···2008年12月12日(金)15:00~15:50

• 教 科…国語科

• 学 年…1 学年

• 授業者:與那覇 直樹 先生

《授業参観記》萩野 敦子 先生(学部:国語教育教室)

師走も半ばにさしかかった 12 月 12 日、與那覇直樹先生による中学 1 年国語科の「根拠を明確にした意見文を発表しあい、正しく聞き取り、客観的に判断しよう」を主題とする授業を参観させていただいた。もとは全 7 時から構成される「書くこと」をメインにした単元とのことで、前時までに生徒たちは「中学生に制服は必要か、不必要か」について、根拠を二点掲げたうえで自身の立場を表明した意見文を書いてある。本時は、グループ(4~5 名)ごとに各人が意見文を読み上げ、聞き手はそれに対してやはり根拠を明確にしたうえで「納得したか、しないか」を文章にまとめ、発表者に表明する、という内容であった。つまり、「書くこと」を中心に据えた単元ながらも、活用編として「話すこと」「聞くこと」が関わってくる学習内容ということである。

中には指示を漠然としか聞いておらず活動の手順を間違えているグループもあったが、 授業者が綿密に手立てを講じておられたので、おおむねスムーズに展開されていた。

この授業の最大の特徴は、普通であれば「話し手→聞き手」の流れは一方通行で終わりがちなところを、聞き手が感想をきちんとした意見として発表者に返すことで、「話し手」と「聞き手」の役割交換が行われ、「話し手→聞き手=話し手→聞き手」という往復の活動となっていたところにある。グループによっては復路の活動で「話す」「聞く」緊張感が薄れている場合も見受けられたが、多くは意見を往来させること、すなわち討論することの緊張感と高揚感を味わっているようであり、生徒たちの生き生きとした表情が印象的であった。

授業者は、自分自身の意見と同じであると否とにかかわらず、話し手の主張に「説得力がある」と感じられれば「納得」と判断するようにと指導していたが、やはりそこは1年生、中には自分の意見に固執し「納得できない」と懸命に反論している生徒も見受けられた(それはそれで、見ていて面白かったのだが)。授業者もグループ活動に先立ち「聞く」とは「耳で聞く/目で聞く/心で聞く」ことだと強調していたが、「心で聞く」すなわち「相

手の立場になって聞く」態度を生徒全員に浸透させることが、今後の国語科の目標のひと つとなろう。相手の言葉に耳を傾けながら自己を省み、自身の内面的成長を促していくこ との繰り返しが、中学生にとっては必要なことだからである。

ちなみに、私が見た限りでは、「制服必要派」の根拠としては「他中学の生徒と区別され、自分たちのアイデンティティを明示できるから」というものが、また「制服不要派」の根拠としては「三年間しか着ないわりに高額だから」というものが、それぞれ多かったようである。どちらも一理あるといえようし、今回の1年生対象の授業においては「根拠を明確にしたうえで意見を表明する」ことが目的であるから、根拠が多少主観的なものであっても彼らの意見を尊重すればよいと思われる。しかし、今後学年を重ねていくうえでは、「制服」の「制」というものが自分たちの日常的な知見を超えて社会にとっていかなる意味を持つものであるかに、成長段階のどこかで向き合う必要が生じてこよう。「制服を着る自分たちの思い」ばかりでなく「制服を着ている自分たちを見る人々の思い」に配慮する必要も生じてこよう。「たかが制服されど制服」というわけで、実は社会に生きることにつながるテーマでもあることを、現段階で実感するのは無理としても、いずれ考えてみてほしいものだと思った。

話がやや逸れたが、今回の研究授業は、「書く」「話す」「聞く」が有機的に結び合うとともに生徒たちの自主的な言語活動を促す非常にすぐれた実践であり、授業者であった與那覇先生のご努力はもちろんのこと国語科スタッフ全員のたゆまぬ研究心・向上心とチームワークの良さが、改めて実感された。私たち学部教員にとっても学ぶべき点が多く、有意義な機会を与えていただいたことに感謝したい。

【2】2008年度の委員会を振り返って

2008年度第1回目の教育学部共同研究推進委員会が、2008年5月14日(水)、開催されました(その際、会議通知が2007年度委員の皆さんに配信され、出席者は半数くらいでした)。その議事要旨は、真栄城勉委員長より、委員各位に配信されています。改めて、その要点を述べさせていただきます(2008年度「通信」第1号に掲載)。

①副委員長を提案どおり承認した。

佐久間正夫副委員長(学部·附属学校共同研究推進部会長)

里井洋一副委員長(地域貢献部会長)

②委員会組織の再編を、原案どおり承認した。

佐久間副委員長と里井副委員長は、ぜひ部会を招集して周知徹底を試み、<u>出来るとこ</u>ろから積み重ねていただきたいと存じます。

共同研究推進部会設置の意図は、以下のとおりです。

- 1. 教育学部と附属学校の連携のあり方を外部から見て分かるようにする。
- 2. 附属小学校と附属中学校の連携強化を図る。
- 3. 外部の教科専門教員の関わりを深める。
- 4. 学部・附属学校連携実態のエヴィデンスを確保する。

2008年度は、特に上記4.に関わりますが、共同研究推進部会の実施体制の一環として、「通信」による情報提供、意見交換等に重きを置きました。

なお、2008年度の学部・附属学校共同研究推進部会としては、①「通信」発行にとどまり(附属中学校の公開授業研究会の案内等)、部会の開催を行なわなかったこと、そのため、

②上記4以外の、組織化が図れなかったこと、等々が課題として残されました。

学部·附属学校共同研究推進部会報告

2. 各班の活動報告

数学教育教室班 理科教育教室班 音楽教育教室班 生活科学教室班 技術教育教室班

(数学教育教室班)

【1】今年度の活動計画

(1) 研究会への参加

2008 年 11 月 8 日に附属中学校において開催される第 21 回教育研究発表会, 2008 年 11 月 22 日に附属小学校において開催される第 2 5 回研究発表会, および 2009 年 3 月 1 日に附属小学校において開催される第 20 回千原初等教育研究大会などへの参加を予定している。

(2) 共同研究の推進

今年度も、数学教育実践研究の講義において、附属中学校の教員と学部教員との共同講義の機会をもち、より実践的な講義を学生に提供して行く予定である。具体的には、前期15回の講義のうち6回の講義において、学習指導案の作成や模擬授業の実践を、現職教員の体験をもとに共同で指導して行く。

【2】今年度の活動内容

(1) 研究会への参加

まず,各附属学校の研究発表会についてであるが,2008年11月8日に附属中学校において開催された第21回教育研究発表会へ,指導助言・共同研究者(小田切),あるいは一般参加者(湯澤)として参加した。2008年11月22日に附属小学校において開催された第25回研究発表会へは大会主催者(学校長:小田切),あるいは一般参加者(湯澤)として参加した。また,2009年3月1日に附属小学校において開催された第20回千原初等教育研究大会へも、大会主催者(学校長:小田切),あるいは一般参加者(湯澤)として参加した。

次に、各種校内研究会についてであるが、 まず、6月5日に附属小学校において行われた校内研究会の講師として指導助言を行った(湯澤)。また、9月10日に附属小学校において行われた教育実習研究授業や、9月19日に附属中学校において行われた教育実習研究授業を参観し指導助言を行った(小:湯澤、中:金城・日熊・山城)。9月29日に附属中学校において行われた公開授業研究会へも、指導助言・共同研究者(小田切)、あるいは一般参加者(金城・湯澤)として参加した。

(2) 共同研究の推進

今年度も、数学教育実践研究の講義において、附属中学校の教員(比嘉・江谷・太田)と学部教員(湯澤)との共同講義の機会をもち、より実践的な講義を実践した。具体的には、5月20日に事前の打合せをもち、次いで前期15回の講義のうち6回の講義において、学習指導案の作成や模擬授業の実践を共同で指導した。学生からは、現職教員の体験をもとにした実践的な助言がもらえてよかったなど、肯定的な感想が多く寄せられ、今後もこうした実践を続けて行く必要性が改めて感じられた。また、今年度は数学教育教室から附属小学校長が選任され(小田切)、学校運営とともに毎週の校内研究会を主催した。

(理科教育教室班)

【1】 今年度の活動計画

- (1) 附属小中学校の校内研修・研究発表会への協力 (授業研究会への参加、指導助言等)
- (2) 科学研究費補助金の助成事業への協力(授業提供)
- (3) 教育実習生の研究授業への参観
- (4) 教育実践を主体とする課題研究(卒業論文)への協力

【2】今年度の活動内容(計画外のも含む)

(1) 人事異動に伴う歓送迎会(計画外)

5月30日に、西原町「いぶしの銀治郎」にて、今年度人事異動で附属学校へ配属された理科担当教員と、教育学部の理科教育講座へ採用された教員との合同歓迎会兼懇親会が開催された。附属小学校理科部会4名、附属中学校理科部会3名、教育学部理科教育講座に所属する職員6名が参加した。

(2) 附属小中学校での校内授業研究会への参加

5~6月にかけて行われた附属小学校での校内授業研究会(4回)と、附属中学校の校内授業研究会(1回)に教育学部理科教育講座所属教員が参加した(授業参観・研究協議)。

(3) 科学研究費補助金の研究事業への協力

松田伸也教授が研究代表者で理科教育講座所属教員全員が分担者となっている科学研究 費補助金(基盤研究(B))の研究事業(20300261:沖縄の亜熱帯環境を生かした自然科学教育の実践的研究)での授業実践の一部を附属中学校へ依頼し、実際に授業を行った(授業者:屋良 徹 教諭)。

実施日:7月1日 実施場所:沖縄こどもの国

対象:附属中学校 第2学年全4クラス。

実施の成果と課題については、9月に開催された日本理科教育学会全国大会で発表した。

(4) 教育実習生の研究授業への参加、指導助言

9 月の教育実習期間中は、小中を問わず、公開された全ての研究授業に、都合のつく理 科教育講座所属教員が参加した。小学校では代表授業者の研究協議に助言者として参加し た。中学校では、参観した大学教員全員が研究協議会へ参加した。

(5) 附属小中学校での公開授業研究会への参加

11月に開催されている附属小中学校の公開授業研究会へは理科教育講座所属教員が指導助言者として参加するとともに、指導助言者以外の講座所属教員も研究授業ならびにその後の研究協議会に参加した。

- (6) 附属小学校での千原初等教育研究会への参加・指導助言
- 3 月に行われた標記研究会の理科部会に指導助言者として参加し、あわせて一般参加者としても理科教育講座の教員が参加した。
- (7) 卒業論文 (課題研究) への協力

理科授業実践に関する課題研究を行った4年次学生の研究について附属学校教員が必要な場・授業を提供し、研究遂行に際して学部教員とともに支援・指導を当該学生へ行った。

(音楽教育教室班)

【1】今年度の活動計画・活動内容

- (1) 研究会への参加
- ①2008年10月17日:

第7回附属中学校公開授業研究会(校内研)に、泉 惠得、シャイヤステ榮子、津田正 之が参加。テーマ「日本の音楽に親しもう・越天樂」。授業者・新垣頼子教諭。

②2008年11月8日:

第 21 回教育研究発表会に、泉、シャイヤステが参加。テーマ「日本の音楽・荒城の月を 鑑賞しよう」。授業者・新垣頼子教諭。

なお、泉はゲストティーチャー、シャイヤステは研究協力者の役割を担った。

③2008年11月22日:

第25回附属小学校研究発表会において、音楽の授業研究会にシャイヤステ、津田が、研究協力者として参加した。

- (2) 人事異動に伴う歓送迎会 特になかった。
- (3) 共同研究特になかった。
- (4) 行事への参加
- ①2009年2月18日:

附属小学校の合唱祭にシャイヤステが参加し、「励ましの言葉」を贈る(於 コンヴェンション劇場)。

(生活科学教室班)

家政教育専修では、すべての教員が附属学校と関わる事が望ましいとの共通認識の下に 附属の教員の要望や学部教員からの依頼は、各人で直接行なっている。よって、本年度の 活動についても、教員各々から本票の提出期日までに返答のあったものについて下記に列 記する。

【1】今年度の活動内容

(1) 藤原綾子

琉大附属小学校家庭科:上原一美先生

5月29日 5年家庭科「すずしい着方のくふう」2:25~4:00、生徒数38人

附属小学校の教師 6 人ほどと教育学部家政教育 3.4 年次学生も参加した。5 時半から反省会をもった。ここで指導助言を行う。すずしい着方に関して 4 つの視点(材料、色、形、着方)からクラスの生徒に意見をださせ、すずしい着方にせまる、一方昔の沖縄の着物を示し、すずしい着方の知恵を学ばせる授業であった。

(2) 國吉真哉・藤原綾子

琉大附属小学校家庭科:上原一美先生

- 6月10日 5年家庭科「すずしい暮らしー沖縄の住まいのくふうー」2:25~4:00 附属小の教員6人、教育学部家政教育の学生も参加。5時ころから反省会。国吉と藤原の2 人が指導助言をした。
- 4 つの視点(気温、湿度、日差し、風通し)で、クラスの仲間の意見を聞き、授業を進める。昔の沖縄の住まいの模型(中村家住宅)をみながら、先人のすずしい住まい方や台風対策の工夫についても、意見を出し合い、すずしい住まい方をまとめた。

(3) 田原美和・花城梨枝子

琉大附属小学校家庭科:上原一美先生、栄養教諭・森山尚子先生 11月7・22日 附属小学校公開授業研究大会に向けての検討会及び指導助言

(4) 富士榮登美子

附属中学校家庭科:得能留美子先生

大学院後学期授業科目:「家政教育授業研究」において附属中学校家庭科の授業研究

1. 日 時 平成 20 年 11 月 8 日 (土) 附属中学校研究大会

11月14日(金) 1校時

11月21日(金) 1校時 計3回

- 2. 学年・場所 第1学年・1年4組教室
- 3. 内容 (1) ポートフォリオ作成のためのシャドウィング
 - (2) 授業研究
- 4. 参加者 大学院家政教育専修1年次院生2名

(5) 浅井玲子

附属中学校家庭科:得能留美子先生、国語科 與那覇直樹先生

4 年次 上原あゆみ卒業論文「宮古島における教育実践(長崎・鹿児島・琉球三大学連携事業)」の中学校における保育学習及び交流実践について、中学校の選択授業へ観察参加とアドバイスをしていただいた。

2008年度(平成20年度)附属学校共同研究推進部会報告書

技術教育教室班 清水洋一

【1】今年度の活動計画

- (1) 研究会への参加
- (イ) 第20回千原初等教育研究大会へ参加する予定。
- (ロ) 附属中学校教育実習研究授業へ参加する予定。
- (ハ) 第21回附属中学校教育研究発表会へ参加する予定。
- (2) 共同研究の推進
- (イ) 附属中学校とエネルギー関連施設等の見学会を実施する予定。
- (ロ) 附属中学校とエネルギー環境教育に関する実践的研究を推進する予定。
- (ハ) 附属中学校で「情報教育のリテラシー」に関するアンケート調査を実施する予定。
- (二) 附属小学校と総合的学習のカリキュラムについて共同研究する予定。
- (3) イベントへの参加
- (イ)「沖縄 eco エネルギーフェスティバル」の競技の部及び発表の部へ参加予定。
- (ロ) 共同で電気自動車を製作し、沖縄県工業教育研究会主催の「第10回沖縄県工業 高校エコデンレース」へ参加する予定。

【2】今年度の活動内容

- (1)研究会への参加
- (イ) 千原初等教育研究大会

平成 20 年 12 月 4 日及び平成 21 年 2 月 23 日に、附属小学校の教員、OB及び技術教室の教員とで研究テーマについて意見・情報交換を行った。

- (ロ) 附属中学校教育実習研究授業反省会において助言。
- (ハ) 第21回附属中学校教育研究発表会における助言者を担当。

(2) 共同研究の推進

- (イ) 附属中学校と施設見学会を実施
 - ・平成 20 年 9 月 17 日に、選択技術の生徒が参加した西原浄化センターの見学会の 企画・運営。
 - ・平成21年2月17日に、1年生全員に「エネルギー研修会」としてエネルギー関連施設を見学させた。那覇・南風原クリーンセンター、那覇市リサイクルプラザ、 (株)トリム及びエコインテック(株)の見学会の企画・運営。
- (ロ) 附属中学校とエネルギー環境教育に関する実践的研究
 - ・6月5日に開催した、平成20年度第1回沖縄エネルギー・環境教育研究会において、活動報告及び意見・情報交換を行った。
 - •6月14日に開催した、「沖縄 eco エネルギーフェスティバル」競技の部(エコデンレース)に参加した。
 - ・6月15日に開催した、「沖縄 eco エネルギーフェスティバル」発表の部に参加した。
 - ・7月21日に、エネルギー教育に関する教材開発について、技術科教員と検討会。
 - ・8月11日に、第3回日本エネルギー環境教育学会全国大会(静岡市)において実

践報告。

- ・8月25日に、附属中学校の今年度教育研究発表会に向けて意見及び情報交換。
- ・8月29日に開催された、「拠点大学・エネルギー教育実践校地域交流会」(福岡市) において、情報交換するとともに今後の連携について話し合った。
- ・9月11日に開催した、平成20年度第2回沖縄エネルギー・環境教育研究会において、活動報告及び意見・情報交換を行った。
- ・12月11日に開催した、平成20年度第3回沖縄エネルギー・環境教育研究会において、活動報告及び意見・情報交換を行った。
- ・2月19日に開催した、平成20年度第4回沖縄エネルギー・環境教育研究会において、活動報告及び意見・情報交換を行った。
- ・3月14日、15日に開催された「先生と親子のためのエネルギー教育フェア 2009」 に参加し、意見及び情報交換を行った。
- (ハ) 附属中学校の1年生及び3年生全員を対象に、「情報教育に関するリテラシー」に ついてアンケート調査を実施した。
- (二) 附属小学校と総合的学習のカリキュラムについて共同研究 3月1日に開催された、第20回千原初等教育研究大会の総合の教科領域において、 「新学習指導要領と沖縄の現状に合わせて求められるエネルギー環境教育の展 開」に ついて、講話及びワークショップを実施した。
- (3) イベントへの参加
- (イ) 6月14日、15日に開催した、「沖縄 eco エネルギーフェスティバル」の競技の部及び発表の部へ参加した。
- (ロ) 10月21日に開催された、沖縄県工業教育研究会主催の「第10回沖縄県工業高校 エコデンレース」へ参加した。電気自動車の共同製作及びレースへの参加を支援 した。

地域共同研究推進部会報告

- 1. 地域共同研究推進部会長報 里井 洋一
- 2. NARAE ネット連携事業活動報告 (琉球大教育学部・那覇市教育委員会連携協定)
- 3. はごろもネット連携事業活動報告 (琉球大教育学部・宜野湾市教育委員会連携協定)
- 4. **宮古島圏域における地域貢献活動報告** (琉球大教育学部・宮古島市教育委員会連携協定)
- 5. **竹富町連携事業活動報告** (琉球大教育学部·竹富町教育委員会連携協定)
- 6. **島尻教育研究所連携事業活動報告** (琉球大教育学部・島尻教育研究所連携協定)



1. 2008 年度地域共同研究推進部会長報告

里井 洋一

共同研究推進委員会地域貢献推進部会が 2008 年 7 月 23 日に開かれ、各WGの現況を確認するとともに下記の五点が確認された。その後、推進委員会地域貢献推進部会を開かず、各WGが独自の活動を行った。 21 世紀おきなわ子ども教育フォーラムに関しては、以下の報告にもあるとおり、いくつかのWGは積極的に対応した。地域貢献推進部会を含めて、共同研究推進委員会と教育フォーラムの関係や仕事のありようなど整理する必要があるように思う。

- 一 琉球大学教育学部が地域と共同研究を推進するための部会である。当面は教育学部 と協定を結んだ委員会との連携協力を組織的に保障するための仕事を行う。
- 二 地域貢献推進部会の下に、5つの教育委員会との協定書に基づく連携推進会議に対する教育学部側の実務を担当する5WGを設置する。

5 WG の実務は下記の通りである。

- 1. 連携推進会議委員の選任、但し任命は学部長が行う。
- 2. 連携推進会議で議論される連携協力事業の企画・運営・協議
- 3. WG メンバーの選任、WG でメンバーが選任できない場合は共同研究推進委員から共同研究推進委員会が選任する。
- 4. WG 長を WG メンバーから選任する。
- 5. WG 長は職責で地域貢献部会員となる。
- 三 各 WG は地域貢献部会に連携推進会議の状況を逐次報告する。報告は共同研究推進委員長を通じて学部長へ報告されるものとする。
- 四 部会長は必要に応じて連携推進会議を開く。また WG 長の要求によって開くこともできる。

五 地域貢献部会メンバーおよび各WGは下記の通りである。

地域貢献部会:平田幹夫、浦崎武、里井洋一、各 WG 長

那覇市教育研究所: 真栄城勉、狩侯 昇男、津田正之、日熊典英、清水洋一

竹富町教育委員会:里井洋一、山口剛史

宮古島市教育委員会:緒方茂樹

島尻教育研究所:小林 稔、上地完治

宜野湾市教育委員会:里井 洋一、狩俣 昇男、平田 幹夫、城間 盛市、高橋 美奈子

各 WG の年間の活動は下記のとおりであった。

2. 平成20 年度NARAEネット連携事業活動の実績と評価

文責:津田正之

1. 教育学部生による学習支援

(1) 実績

- 教職体験Ⅱ:城北小5名:石嶺小8名,城東小4名,計17名
- ・実践ボランティア:石嶺小3名,松島小2名,若夏学院1名,計6名

(2) 評価

- ・ 例年通り大過なく実施、「認定書」の発行も順調に進められた。
- 2. 学部教員による教育支援
- (1) 実績
- ① 所轄する学校からの依頼
- ・平田幹夫:特別支援を要する児童への働きかけ、与儀小、4月3日
- ・大城賢:校内研究全体会及び研究開発学校における小中相互授業参観の指導助言,真嘉 比小6月17日,

第2 学年公開授業の事前教材研究及び指導案検討,9 月12 日, 学校英語3 グループ研究会及び12 回校内研全体会,10 月2 日,

- ・道田泰司:思考力を育てる授業づくり、金城小、7月29日
- ② 所内講座
- ・津田正之,音楽科の鑑賞の活動と授業づくり,5月29日
- ③ 夏休みブラッシュアップ講座
- ・緒方茂樹、学級経営講座「特別支援講座」、発達障害の特性と対応、8月1日
- ・吉田安規良, 学習指導講座「理科実験講座」, 理科の授業づくりについて, 8 月 4 日
- ④ 研究所HPでのNARAEネット情報の更新、12 月
- ⑤ 平成20 年度成果報告会及び修了式への参加

前期:真栄城勉,津田正之,前村佳幸,後期:真栄城勉,津田正之,吉葉研司

(2) 評価

- ・①について。校内研の依頼が増加し、HP上で公開した情報の活用が見られる。
- ・②について。前年同様、長期研修員のテーマ(鑑賞教育)と関わる形で、所内講座を開催することができた。
- ・③について。例年通りに実施でき、事業として定着した。今後、ニーズを見ながら多様な人材の活用が課題。
- ④について、前期(5 月)、後期(10 月)の定期的な更新を常態化していきたい。
- ⑤について、もっと多くの教員が参加できるよう呼びかけを工夫したい。
- ・その他,音楽では所内講座などを通して長期研修員の助言に関わることができたが,必要に応じて学部教員が長期研修員の支援をしやすい環境づくりが課題。
- 3. 研究所による教育支援
- (1) 実績
- ① 教育学部授業への支援

池間生子所長, 学校教育実践研究, 10 月

② 県外出身者等の教育実習支援

自然環境教育コース, 宿利原大介:石嶺小2週間, 石嶺中2週間

村山拓司:城北中2週間

-③ NARAE実践指導教員派遣制度の活用

実績なし

(2) 評価

- ①については例年通り実施することができた。
- ②について。2 名、3 校の派遣実績をつくることができた。
- 学生が動く形による無理のない依頼方法を明確にすることができた。
- A 所長名で、NARAE事業の一貫として学生の受入れを依頼する文書を出す。
- B 実習希望学生が、那覇市内の学校にNARAEネット協定に基づく教育実習依頼を個別に行う。
- C 受入れが決まった段階で、教育実習委員から受入校に挨拶を入れる。
- D 尚, 学生による依頼がうまくいかない場合は、研究所にて調整をお願いする。
- ・NARAE実践指導教員派遣制度の活用が大きな課題
- ※次年度の実践指導教員の活用に向けて、学部教員の希望に応じて研究所が教員を斡旋することにした。

4. その他

・会議のシンプル化を図った。

実質全3回, 2回は成果報告会への参加とした。必要に応じた人数の参加とした。

那覇市立研究所のNARAEネット関連のホームページの充実。

http://www.nahaken-okn.ed.jp/naha-c/index.html

「夏休みブラッシュアップ実践講座」実施報告書

| 講座名 師 | 学級経営講座「特別支援講座」 緒方 茂樹(琉球大学教育学部教授) ※NARAEネット協力教員 |
|-------------|--|
| 実施日時 | 平成20年8月1日(金曜日) 14:00~16:00 |
| 参加者 | 4.7人 |
| 講座内容 | 発達障害の特性と対応 - 特別支援教育充実のために- 1. 特別支援教育の基本的な考え方と方針 2. 校内の対応・個に応じた対応 3. 校務分掌の工夫・実際 4. 各発達障害の特性とその対応 (事例をもににした対応の仕方) 5. ネットワークの活用 |
| 参原関など | ○具体的な事例が聞けてよかったです。以前ララ子たちのことを理解したの対応を考えると心が痛いです。そういう子たちのことを理解したから対対をあるとのが痛いです。そういう子たちのことを理解したから対対をたいと思います。 ○話がとてもわかりやすく、ユーモアもあったので乗り頭を足していまった。今日は A D H D 中心だったので、次回にぜつ時間をはいつの講座はについている。今日は A D H D 中心だったので、次回にぜつは明確についている。中でもの講像は初めてでした。まれのは、当から、未っとしたが、教師の立場をおようとがしている。当時間は初めてでした。本少としたりというできるよう。子できる支援へしている。とした。○大人になった時、自分できるとがいいます。は、一次にあります。といと考えた。また、発達降害を持つている子とも通過のよりました。といと考えた。また、発達降害を持つている子とも通過のよりにいいてもんだかホッとしています。は、日本のか、教育ならがはいいなんだかホッとしています。といます。教育を自己でいいないでも、だかホッとしています。といます。といます。といます。といます。といます。といます。といます。と |
| その他 特記事項 | ○講師の結方先生は、NARAEネットの協力教員で練客児教育がご専門です。 ※NARAEネット(幼児・児童・生徒の学力向上を目的として琉球大学教育学部と那覇市教育委員会が提携した事業) |

「夏休みブラッシュアップ実践講座」実施報告書

| 講座名 | 学習指導講座「理科実験講座」 |
|-------------|---|
| IM 05 | 吉田 安規良 (琉球大学教育学部准教授) ※NARAEネット協力教員 |
| 実施日時 | 平成20年8月4日(月) 14:00~16:30 |
| 参加者 | 1 3人 |
| 講座内容 | 「理科の授業づくりについて」 1.特試験管1本でも「不思議」を体感できる? 2. どうすれば数材研究できる? 3. 授業の行き詰まりは「発問」次第? 4. 公外共有と「三人寄れば」 |
| 感想・質 | ○不思議のネタがよかった。もう少し紹介してほしかった。 ○質問の仕方や教材研究のやり方等、とても分かりやすかったです。 ○発問の仕方の工夫が大切だと感じた。「Why?」ではなく、「How?」と問くこと。これから質問する際には、そのことに注意していてうと思う。 ○試験管の実験、すぐにやってみたいと思います。衣装ケースに教材を入れておく方法もいい考えだと思いました。もっとネタ的な実験をマスターしたいので紹介してください。 ○試験管と使った実験がマスターできてたいへんよかったです。できれば視聴覚を材等を使っての調底や、わかる授業のための具体的な内容があるともっとよいと見います。 ○試験管を使っての調底や、わかる授業のための具体的な内容があるともっとよいと見います。 ○試験管の不思議を確実にできるように練習しようと思います。また、今まで授業で「在ぜ」を多用していました。確かに関金の反応はなかったです。 ○おもしろい実験でした。子どもはこうすれば理科が楽しくなるんだなと思いました。また、地学、生物分野での授業の様と、した。また、地学、生物分野での授業の様人方法についても聞いてみたかったです。 ○現料の授業で使う道具やその購入先をとても具体的に示していただき授業のイメージがかなりはっきりと描けるようになった。 |
| その他 特記事項 | 講師の吉田先生は、NARAEネットの協力教員です。理科教育がご専門で、「小学校における基本的な化学実験の技術」「理科室の整理、有効活用の方法」等、コニークな授業作りをご提案なさっています。 |

平成20年度 第1回NARAEネット推進委員会議事録

平成20年5月8日(木) 16:00~17:30 琉球大学教育学部会議室にて

【参加者】 琉球大学: 中村透 真栄城勉 狩俣昇男 津田正之 清水洋一 日熊隆則 那覇市立教育研究所: 池間生子 上江洲毅 崎山嗣一郎 小林貞浩

【配布資料】

「平成20年度 第1回NARAEネット推進委員会 会順」

「平成20年度 NARAEネット推進委員会開催日時・内容 (案)」

「平成19年度 第4・5回NARAEネット運営会議資料 2007.3.5 に加筆 (「平成19年度NARAEネット連携事業活動の評価」)

「平成20年5月8日現在 NARAEネット協力教員及び講座一覧」

はじめのことば(司会:事務局長 上江洲)

自己紹介を行う。

確認事項

- 1 推進会議年間計画ついて(上江洲)
- ・資料をもとに提案。第4回の日程を10/31に変更している。この計画で進めていくことを確認する。
 - 2 協定書について(上江洲)
- ・申し合わせ事項の3では、委員は10名程度・同数としているが、オブザーバー参加として琉大の浦崎先生にも参加頂くことを了解していることを確認した。

活用手順について

- 1 大学生
 - ・ 琉大教育学部では、教職体験 ・教育実践ボランティアを通じての実績がある。
- ・研究所で呼びかけ市内学校からの希望があり、琉大では学生に呼びかけを行ったが、 実績は0であった。
- ・そこで、昨年第4・5回の会議で確認したように、今年度からは教育研究所での NARAEネットによる大学生支援の学校募集は取りやめる。他の支援の可能性を探ることを再 度確認した。(当面は、大学での取り組みのみとする。)
- ・また、琉大のカリキュラム改革の中で教職体験 を広げていくことになると、今後 (2~3年程度後)大学生が学習支援に関わる場として、公立の学校の受け皿が必要 になることが報告された。(真栄城)
 - 2 大学教官
 - ・平成20年度5月現在の那覇市内学校からの大学教官2名の活用実績がある。平田幹夫先生(与儀小学校から要請・実施)大城賢先生(真嘉比小学校から要請)

- ・大学協力教員の一覧の追加と削除について確認。(津田)
- ・呼びかけの方法は、これまで通りでよいことを確認した。
- ・閲覧の方法については、これまで通り教育研究所HP上で掲載することを確認した。

3 学校教員

- ・NARAEネット活用の実践指導教員については、H18 年度に下地さとみ指導主事派 遺、H18・19 年度の教育実習生事前学習に糸数所長派遣の実績がある。
 - ・将来的にNARAEネット活用の実践指導教員の派遣の際にも謝金が発生しないこと。 また、今後も実践指導教員という活用の枠を残していくことを確認した。
 - ・大学の要望等を引き受けた形で、教育研究所での紹介等を行っていくことが、新たに提案された。(真栄城)

推進会議の持ち方について

1 参加人数

・参加人数については、10名程度とはなっているが、適時必要に応じた人数の参加とすることを確認した。

2 回数

・NARAEネット推進会議の最初と最後は、お互いに全員が参加する。その他については、必要に応じて事前調整することとする。また、成果報告会の第3回・6回は、会議とはしないことを確認した。

その他

・「みどりのカーテン」に関しての実践者や、興味をもっている先生を研究所から紹介 してほしいという要望があった。(清水)

教育学部長あいさつ (中村诱学部長)

新教育学部長となった中村透先生から、ご挨拶をいただいた。

平成20年度 第4回NARAEネット推進会議議事録

平成21年3月6日

1 出席者

 琉大
 津田
 真栄城
 清水
 狩俣
 (4名)

 研究所
 池間
 上江洲
 崎山
 宇江城(4名)

2 配布資料についての話し合い

p 1

<u>(1)</u> 実績について

- ・研究所主催成果報告会については学生や院生等にも呼びかけてもっと多くの教員が参加できるようにしたい。
- ・ 特別支援に関する研修は現場のニーズが高いので、できるだけ対応していきたい。

〈話し合いメモ〉

- ・NARAEネットの活用については、あまり手続きを複雑にしない方がよい。
- ・4月・5月にパンフレットを配付したが広報の面であと一歩であった。
- ・現場はまだ紙媒体が主流なので、チラシ等で広報をしていきたい。
- ・新任の先生方へのアプローチは、大学側で責任を持ってやる。

p 2

(1) 実績について

- ・県外出身者等の実習支援については、本人が直接お願いをすることを基本とする。
- ・NARAE実践指導教員派遣制度の活用については、小中の現場の先生方対象であるが実績はない。
- (2) 評価について
- ・「実習希望学生が市内の学校にNARAEネット協定に基づいて教育実習の依頼 を個別に行う。」については、実習学生が自分で受け入れ先を探すことも有意義であると捉 える。

4 その他 について

- ・今年度の実績は実質3回、全体で5回であった。
- ・「那覇市教育委員会(教育研究所)と教育学部による共同事業ができないか。」については、今後の課題である。

〈話し合いメモ〉

- ・NARAEの活用において,現場の先生方の声は貴重である。授業法や模擬授業 をしてもらうなどが考えられる。
- ・車賃の付く実施事業があるが、安定性に不安がある。(1時間5千円を保てるか。)
- ・現場の先生方を活用する良い方法はないか。例えば、大学で指導したことが 実績 として履歴に残るようにするなど。
 - ・今は当事者に任せているが、希望者を募ってもよい。言葉で投げかけをするが、 投げっぱなしになっている面もある。募集期間を設けてやってみる方法もある。 2 学期制の学校にとっては、7月の終わり頃が時期的によいと考えられる。「教 科教育法」で活用できるのでは。

・「エネルギー環境教育」についての情報

教育現場ではあまり関心がないかもしれないが、いくらかの予算が付くので、関心のある先生がいたら琉大で授業をしてもらうこともできる。経済産業省の事業推進ともタイアップしてやってきた。学校で実施できるとしたら、総合、理科等とつなげる等の方法がある。



ARAEネット協力教員及び講座一覧

NARAEネット協力教員及び講座一覧

平成20年5月

メールアドレス中の「@」は、半角に直して下さい。(迷惑メール防止のために、全角で記載しています)

語教育

梶村 光郎(国語科教育)895-8330 kajimura@edu.u-ryukyu.ac.jp

・国語科の授業づくり(作文指導など)

村上 呂里(国語科教育)895-8331 rori@edu.u-ryukyu.ac.jp

・国語の教材研究および授業づくり(文学教材を中心として)

会科教育

里井 洋一(社会科教育)895-8343 satoi@edu.u-ryukyu.ac.jp

・社会科授業づくり

島袋 純(政治学)895-8473 junshima@edu.u-ryukyu.ac.jp

・ワークショップによるシティズンシップ教育~地域課題発見から解決策立案の担い手を育てる~

田中 洋(法学)895-8340 tanakah@edu.u-ryukyu.ac.jp

・学校教育における法律問題、法教育のお手伝い

西岡 尚也(地理教育)895-8410 nishioka@edu.u-ryukyu.ac.jp

・国際理解教育、開発教育に関わる教材づくり、地球儀、地図帳の指導など

長谷川 裕(社会学)895-8338 ytk16761@edu.u-ryukyu.ac.jp

・現代社会における教育、現代社会における子ども・若者について

山口 剛史(社会科教育・へき地教育)895-8336 t-yama@edu.u-ryukyu.ac.jp

・社会科の授業づくり・教材づくり

・沖縄戦学習などの平和教育の教材開発、フィールドワークの方法・教材化

・へき地教育(離島における学校と子どもの課題、地域素材を活かした総合学習)

高良倉成(経済学)895-8341 cds4@edu.u-ryukyu.ac.jp

・経済時事問題を読み解く勘所

3. はごろもネット連携事業活動報告

平成20年度第1回「はごろも教育ネット」推進委員会議事録

日時:2008年6月10日(火)午後2:00~午後3:30

場所: 宜野湾市教育研究所はごろも学習センター

出席者:長崎光義(委員長・研究所長)、田場勝(指導主事)、下地京子(嘉数中校長)、

伊佐明美(長田小校長)、平田幹夫(琉大)、城間盛市(琉大)、高橋美奈子(琉

大)(敬称略) 司会: 田場

記録: 高橋

配付資料:.「琉球大学・はごろも教育ネット」推進委員会設置要領(1ページ)

・協定書に関する申し合わせ事項(1ページ)

「はごろも教育ネット」推進委員会要望事項(1ページ)

議題および議事内容:

- 1.長崎研究所長からの挨拶と本委員会の趣旨説明
- 2. 官野湾市教育委員会から琉球大学教育学部への要望事項について
- ① 琉大学生による学習支援ボランティアについて
- ・伊佐委員からは、学習支援ボランティアが各学校現場で大変助かっているという報告があったまた、できることなら派遣人数を増やしてほしいという要望があったが、平田委員から既に琉大の遺学生の規模は全国的に見てもかなり大きいこと、さらに7市町村から要望があること、また宜野湾市はどの市町村よりも多く派遣されていることから、ボランティアに参加する学生の人数からすると現実的にはこれ以上増やすことが難しい旨の説明があり、了承していただいた。
- ・長崎研究所長から、ボランティアに来てくれた学生へ教育委員会名で感謝状を出すことを(那覇市では既に行なっているとのこと)、今後検討していきたいという提案があった。一方、平田委員からは琉大側からしたら子どもたちから学びを得るので子どもたちへの学生自身の手作りの感謝状(感謝の手紙)を出させるように指導していきたいとの報告があった。
- ・伊佐委員からは、学習支援ボランティアについて、各学校での転勤に伴う学内での引き継ぎがうまくいっていない場合や、校務の忙しさからから見落とした学校が応募していないのではないかという意見が出たが、平田委員から9月初旬には各学校に昨年度の報告書と募集要項が配布されているという報告があった。
- ・平田委員から、学生支援ボランティアが受け入れ学校の全ての先生方に認知されていないため に、学生がボランティアに行っても、「私は学生ボランティアはあまり必要ない」と言われたケースが あったとの報告があった。
- ②新学習指導要領に基づく「活用する力」を育てる授業づくりについて
- ③各教科(国語、算数・数学、英語等)の授業支援について
- ・上記②と③について、長崎研究所長より新学習指導要領に基づく授業づくりに参考になる講義があれば、聴講したいという要望が出た。この件について、城間委員から各教員が各々の講義内

で新学習指導要領に関する講義を行なっているかも分からないが、それだけを科目として提供していないので授業に参加することは難しいとの説明があった。しかし、該当する大学教員に校内研修の講師として依頼してはどうかという提案がなされた。一方で、平田委員よりこういった依頼を学内教員に投げかけることは可能であるが、今後は免許更新制度が始まることにより、大学教員も身動きが取れない状況になるので、現実的には難しいのではないかという意見があり、宜野湾市教育委員の方々にはご理解していただいた。

④琉球大学教育学部附属小・中学校との連携について

長崎研究所長から、大学の教員が附属小・中学校で授業や講演をする場合に、宜野湾市立学校の教員に聴講させてもらいたいとの要望が出た。

⑤校内研究等の共同研究態勢について

・ 宜野湾市教育委員会推進委員の方々から、現在各小中学校で指定を受けている校内研究等について、大学側からの専門的なアドバイスがほしいとの要望があった。

⑥その他の要望について

- ・下地委員より部活動のコーチとして琉大学生を派遣できないかとの要望が出された。
- この件について、平田委員より教育学部及び他の学部等に、学校独自で作成したボランティア募集のポスターを各学部の事務室の許可を得て掲示する方法を採れば、学生を集めやすいし、これまでそのような問いあわせについては、そのようにアドバイスをしているという回答があった。
- ・伊佐委員より国際理解教育を行なうために琉大から留学生を派遣してほしいとの要望が出た。また、そういった要望をどこにすればよいのかと問い合わせがあった。この件について、琉大側か教育学部であれば英語科、学内では留学生センターなどが窓口として対応可能である旨の回答があった。ただし、こういった依頼は各学校からではなく、教育委員会でまとめて依頼書を出すほうが有効であるとの説明があった。
- 3. 琉球大学教育学部から宜野湾市教育委員会への要望について
- ①外国人児童生徒や日本語指導を必要としている児童生徒を受け入れている宜野湾市の各学校を実践研究の場として提供することについて
- ・高橋より日本語指導を行なっている各学校を日本語教育実習などの実践研究の場として提供してもらいたい旨の要望を出したところ、宜野湾市教育委員会から今後の検討事項として具体的な手続きなどを話し合うための場を持つことを了承していただいた。

平成20年度 第2回「はごろも教育ネット」推進委員会 議事録

日 時: 2008年9月9日(火) 午後2:00~午後3:30

場 所: 琉球大学教育学部会議室

出席者: 長崎光義(委員長·研究所長)、田場勝(指導主事)、下地京子(嘉数中校長)、

與那嶺剛(指導主事)、里井洋一(副委員長・琉大)、狩俣昇男(事務次長・琉大)、真栄城勉(琉大)、平田幹夫(琉大)、城間盛市(琉大)、髙橋美奈子(琉大)

(敬称略)

司 会: 田場 記 録: 髙橋

配付資料:・資料1:第1回「はごろも教育ネット」推進委員会議事録(1ページ)

・資料2:第2回「はごろも教育ネット」推進委員会検討事項(1ページ)

・資料 3:「平成 21 年度からの琉球大学教育学部」冊子(6ページ)

·資料 4:「平成 21 年度 琉球大学大学院教育学研究科(修士課程)案内」(冊子)

・資料 5: 琉球大学大学院教育学研究科 長期履修制度の取扱い (2ページ)

・資料 6: 琉球大学科目等履修生規程(2ページ)

・資料 7: 平成 19 年度フレンドシップ事業報告書 子ども理解と実践的指導力の 向上を目指した「教育実践ボランティア」に関する実践(12)報告書(冊子)

・資料 8: 平成 20 年度 教育実践ボランティア活用してみませんか (8ページ)

議題および議事内容:

- 1. 真栄城教育実践総合センター長からの挨拶
 - ●教育学部改組の説明(資料3参照)
- 2. 長崎研究所長からの挨拶と第1回委員会議事録の確認(資料1参照)
- 3. 本委員会の事務手続き上の確認(里井)
 - ●議事録作成は開催地の委員が担当する。また、会の開催連絡や議事録送付などについては宜野湾市教育委員会の窓口は田場委員、琉球大学の窓口は狩俣事務長とする。
- 4. 琉球大学大学院教育学研究科の現職を意識した受講特例の説明(里井)
 - ●琉球大学大学院教育学研究科の説明。大学院での開講科目と各教員の専門が一覧できる(資料4参照)。
 - ●長期履修制度と科目等履修生の説明(資料5・資料6参照)
 - ●田場委員からの要望により、大学院の出前説明会を 10 月 3 日 (金) に実施される宜野湾市の校長会で行うことを決定。
- 5. 連携・推進可能な課題の検討 琉球大学教育学部からの提案(資料2参照)
 - ●宜野湾市の各校での具体的な要望を大学側に提示してもらえると、協力体制が作りや すい(里井)。
- 6. 連携・推進可能な課題の検討 宜野湾市教育委員会からの提案(資料2参照)
 - ●琉球大学教員の人材バンクリストが欲しいとの要望(長崎)。

資料 4 の大学院案内も参考になるし、また那覇市のNARAEネットで作成した 人材バンクリストがあるので教授会での了承後、はごろも教育ネットに紹介することも可能(真栄城)。 ●出前授業の推進についての要望(長崎)。 具体的な学校側の要請があると大学側は動きやすい(里井)。

7. その他 (情報交換)

- 嘉数中学校の外国人生徒指導についてのボランティアの要請(下地)。 橋研究室で学生の実践研究を兼ねて引き受ける。今月中に日程調整を行う(髙橋)。
- ●実践ボランティアの資料を今週木曜日に小林先生が宜野湾市の各校に配布する予定 (平田)。(資料 7・8 参照)
- ●実践ボランティアの中学校への派遣要請(田場)。 現時点では小学校の配置だけでも数が多く精一杯であるが、できるだけ派遣するよう努める(平田)。
- ●教育学部のみならず他学部からも教職免許取得予定の学生は、教職への意識を向上させるためにも、できるだけ実践ボランティアに参加してもらうよう周知徹底してはどうかの提案があった(城間)。
- ●予算がなくても教育学部との連携要請は可能かどうか (下地)。 現在、どの機関も予算が切り詰められているので、お互いにギブアンドテイク で行うのが本委員会の趣旨 (真栄城)。
- ●嘉数中学校の特別支援担当者に月1回のレクチャーの要請(下地)。 琉球大学障害児教育実践センターの浦崎武先生に相談してはどうか(真栄城)。
- ●学生支援ボランティアの認定証の手続き説明(平田)
- ●現在、琉球大学教育学部が文科省に申請中の学力向上を意識した研究プロジェクトについて、予算が認められた場合には、そのモデル校として宜野湾市に協力要請する可能性がある旨の説明。9月27日(土)午後3時から5時まで実践センターにて学力向上研究会を開催予定(平田・真栄城)。
- ●次回委員会の開催日時 12月9日(火)午後2時から。

以上

平成20年度 第4回「はごろも教育ネット」推進委員会 議事録

日 時: 2009年3月10日(火) 午後1:10~午後2:00

場 所: 琉球大学教育学部学部長室

出席者: 長崎光義(委員長・研究所長)、田場勝(指導主事)、下地京子(嘉数中校長)、

里井洋一(副委員長・琉大)、狩俣昇男(事務次長・琉大)、辻雄二(琉大)、

平田幹夫(琉大)、城間盛市(琉大)、髙橋美奈子(琉大)(敬称略)

司 会: 田場 記 **録**: 髙橋

配付資料:

資料1:第3回「はごろも教育ネット」推進委員会議事録(2ページ)

・資料2:第4回「はごろも教育ネット」推進委員会検討事項(1ページ)

資料3:「21世紀おきなわ子ども教育フォーラム理念」(1ページ)

・資料4:「21世紀おきなわ子ども教育フォーラム プロジェクト企画の公募

について」(7ページ)

資料 5:「「教職指導」職場1日体験プログラム」(3ページ)

議題および議事内容:

- 1. 長崎委員長からの挨拶と第3回委員会議事録の確認(資料1参照)
 - ●宜野湾市教育委員会は人事異動があり、長崎委員長も次年度からは宮古に異動。
- 2. 副読本作成委員の依頼に対する回答(資料2参照)
 - ●第3回「はごろも教育ネット」で里井副委員長より提案された宜野湾市小学校 社会科の副読本作成にあたって、普天間小学校の大湾修先生と大濱覚先生のお二人が 宜野湾市教育委員会からの委嘱を受け、協力することとなった。 既に、学校長とご本人からは内諾済み。
- 3. 教育相談指導講師の依頼(資料2参照)
 - 次年度から実務研究員が嘉数中学校の宮里剛先生に変更となる。 ついては、研究領域が「教育相談」ということで、琉球大学へ研究アドバイザーの 依頼があり、平田委員が快諾した。
- 4. 平成21年度はごろも教育ネット推進会議開催日程のお知らせ(資料2参照)
 - 次年度も今年度同様に、6 月、9 月、12 月、3 月の第 2 火曜日午後 2 時から会議 を開催する。

しかし、6月については、宜野湾市研究所が別業務があるため、6月11日(木)への変更依頼があった。

琉球大学側も次年度から改組によって、推進委員会メンバー等の変更があるため、 現段階では不明。後日、新組織に変更後、日程調整を検討する。

- 5. 「21世紀おきなわ子ども教育フォーラム」の紹介と公募案内(資料3・4参照)
 - ●琉大の辻先生(フォーラムの事務局長)より、次年度から開始される文部科学省特別教育研究経費連携融合事業「21 世紀おきなわ子ども教育フォーラム」の紹介があっ

た。宜野湾市の各小中学校の現場の先生方にも応募していただき、教育学部教員と 連携で関わってもらいたいとの依頼があった。4 月にフォーラムの立ち上げ式とと もに、説明会を実施予定とのこと。

● 長崎委員長からは、宜野湾市としては協力していく方向で考えているが、教育学部 教員の人材バンクリストがほしいとの要望があった。

NARAEとともに使用できる新版を現在作成中とのこと(里井)。

6. 「教職指導」の協力依頼(資料5参照)

●城間委員より、平成19年度から琉球大学で1年生に必修としている「教職指導」の概要説明があり、21年度は9月末に実施するので、宜野湾市の特に中学校に派遣受け入れ校として協力してほしいとの依頼があった。

宜野湾市では2学期制なので9月末は学期末にあたり、協力が難しい。4月初旬の校長会でアナウンスしてはどうかの提案が出された。

7. 次回委員会の開催日時について

上記4で記載したように、次回日程については未定(6月に「はごろも学習センター」で実施)。

以上

4. 平成 20 年度 宮古島圏域における地域貢献活動報告

特別支援教育専修 緒方茂樹

外部講師招聘研修会(年間2回)

〇 家庭科研修会

日時…平成 20 年 11 月 14 日(金)14:20~17:00

場所…宮古島市下地庁舎1階会議室

講師…琉球大学教育学部 浅井玲子准教授

内容…生活を科学するということ、幼児とのふれあいと関わり合いの工夫、沖縄の中学生と高齢者に関する 学習

参加者…小中学校教諭 7名

○ 特別支援研修会(通級指導)

日時…平成 20 年 12 月 19 日(金)14:45~17:00

場所…宮古島市下地庁舎1階会議室

講師…都城市立明道小学校 石本隆士教諭

内容…通級指導教室における教科指導

参加者…小中養護学校教諭等53名

1, 宮古島市特別支援学級等訪問指導(年間5回)

場所:北中学校、平良中学校、砂川中学校、狩俣中学校、平良第一小学校内容:学級訪問(授業参観)と教育相談および校内研修会講師(緒方茂樹)

2, 宮古島市教育研究所 教育研修職員支援(年間6回)

場所: 宮古島市立教育研究所

対象:前期、後期各1名、合計2名

内容:研修生の研究に関する指導・助言等(緒方茂樹)

3, 宮古養護学校・学校支援(年間4回)

場所:沖縄県立宮古養護学校

内容:校内研修会講師および県からの指定研究(教育課程)への指導・助言等(緒方茂樹)

4, 巡回療育・教育相談会(年間 10 回)

場所:働く女性の家「ゆいみなぁ」

対象:宮古県域の保護者、教員、子供たち他

内容:特別支援教育に関する教育相談(地域連携協議会の事業として緒方茂樹が担当)

5, 協定に基づく宮古島市教育委員会と教育学部の代表による連絡推進会議(年間4回)

日時: 4月17日、9月3日、11月14日、2月19日

場所;宮古島市立教育研究所

参加者:本村幸夫(宮古島市立教育研究所所長)、乾邦夫(宮古島市立教育研究所指導主事)、緒方茂樹 (琉球大学教育学部)

以下は外部講師招聘研修会の様子です





5. 竹富町教育委員会との共同研究

1) 竹富町内でのテレビ会議を利用した遠隔共同学習の実施

琉球大学教育学部 仲間 正浩 米盛 徳市

これまで、琉球大学教育学部、長崎大学教育学部、鹿児島大学教育学部三大学連携プロジェクトの予算を使用して、離島間でのテレビ会議を利用した遠隔共同学習の推進を実施してきた。これまでの流れは、次の通りである。

- 2006年12月12日、13日 小浜小中学校、鹿児島県奄美大島名音小学校、長崎県対馬久原小学校間で三大学のサポートにより遠隔共同学習実施
- 2008 年 1 月 22 日、23 日 白浜小学校、鹿児島県奄美大島名音小学校、長崎県対馬久原 小学校間で三大学のサポートにより遠隔共同学習実施
- 2008 年 5⁸ 月 白浜小学校、鹿児島県奄美大島名音小学校、長崎県対馬久原小学校間で大学はテレビ会議システムサーバーの提供のみでほとんど小学校の先生主体で遠隔共同学習を実施

これまでの遠隔共同学習の中、最初の2回は、大学からのシステム設定と打ち合わせおよび共同学習の進め方の内容等のかなり手厚いサポートを行って遠隔共同学習を実施してきた。三回目の2008年5月~8月の期間には大学からのサポートはテレビ会議システムの提供のみで、後は離島の先生方自力でのテレビ会議を利用した遠隔共同学習を行っている。2008年度の実施の経過は以下に示すとおりである。

- 2008 年 9 月 22 日 琉球大学のスタッフが白浜小学校へ訪問、遠隔共同学習の再実施をお願い。
- 2008年10月22日 琉球大学仲間と鹿児島大学教育学部園屋先生が鹿児島県奄美大島名音小学校を訪問、大学のサポートを受けない自力での遠隔共同学習の実施を一番経験している奄美の名音小学校の三角先生にリーダーになってもらい、奄美、対馬、西表の学校の教師での自力での遠隔共同学習実施をお願いした。
- 2009年1月20日、21日に白浜小学校、鹿児島県奄美大島名音小学校、長崎県対馬久原 小学校間でテレビ会議を利用した遠隔共同学習を実施、大学はテレビ会議システム サーバーの提供のみでほとんど小学校の先生主体で遠隔共同学習を実施

2009年1月20日21日の実施を参観した。結論として、テレビ会議システムサーバーの提供以外の大学のサポートをほとんど受けない状況でのテレビ会議システムを利用した遠隔共同学習の実施は困難なものではなくなっていることが確認できた。ただし、参観をした結果、授業の進め方や指導方法に若干の不足を見つけることもあったので、琉球大学側としては、これまでの経験や観察を総合して、テレビ会議システムを授業に簡単に活用するためのノウハウをテキストやマニュアルビデオ、教員研修の計画案等の形でまとめて、一般的な普及が行えるような状況を作ることを目指している。

これまでは、三大学連携プロジェクトの予算を利用して上記の実施を行ってきた。現在、 今後の予算のメドはたっていないので、次年度以降どのような活動が行えるのかは今のと ころ不明である。上記で述べたテキスト等の作成は継続して実施していく予定である。これまでの活動で製作したマニュアルビデオは次の東京学芸大学内のインターネットアドレス http://jccerd.u-gakugei.ac.jp/ で見ることができる。これは、教員養成のためのビデオ教材として別プロジェクトの予算を利用して作成したもので、今後教員養成の教材として利用していきたいと考えている。

2) 竹富町教育委員会と琉球大学教育学部の連携推進会議

日 時:2009年2月6日(金)

開催目的

2008年度の竹富町教育委員会と琉球大学教育学部の協力・協定後の各事業についてまとめ、その到達と課題を明らかにする。

開催概要

時間:15時30分~16時30分場所:竹富町教育委員会委員会室

参加者:竹富町教育委員会(慶田城教育長)

(西原総務課長) (前上里教育課長) (西原教育課長補佐)

琉球大学教育学部(里井洋一:結びあうしま島監修委員)

(山口剛史:結びあうしま島監修委員・船浮校学校体験実施者)

議 題: 各事業の経過報告

結びあうしま島CD-ROM活用等研修会のとりくみ

白浜校・船浮校における学校体験に関するとりくみ

E-Learningを活用した学習支援のとりくみ

今後の日程と事業計画について

学力対策(県教委との連携による事業)等による授業力向上のとりくみについて

次回結びあうしま島CD-ROM活用等研修会のとりくみ

「結びあうしま島」監修委員会の設置について

船浮校・白浜校における学校体験に関するとりくみ

その他

今後の日程と事業計画について

- 1. 学力対策(県教委との連携による事業)等による授業力向上のとりくみについて
- ・ 別紙参照してください。現在県教委と琉球大教育学部は、学力問題に関して文部科学 省より特別予算がついて研究活動をすすめることになりました。離島・へき地教育に関 しても教育学部として位置づけ、とりくむということになりました。

これまでとりくみをすすめてきた「結びあうしま島」CD-ROM研修会のとりくみを発展させながら、より竹富町の学校、先生、子どもたちに還元できるようなものをつくりたいと考えております。

方法としては、「結びあうしま島CD-ROM活用等研修会」を継続して、年3回程度のとりくみとしたいと考えております。

それ以外に、教員研修ないし研究会の開催を援助する、琉大からの講師派遣 等の外部講師派遣による研修の実施、研究指定等による予算措置などが考え られます。今後、本日の協議の結果を受けて予算申請を実施し、50万程度 の予算を確保したいと考えております。

- 2.「結びあうしま島」監修委員会の設置について
- ・ 本日の研修会(編集委員会)を受けて、教材集の最終的な完成にむけた作業を実施したいと思います。

スケジュールとしては、

- 2月いっぱいに教材収集(本日欠席者分をあわせて)
- 3月に監修委員会(教材の最終チェック)
- 4月1日に完成
- 4月2日新入職員の集いにて報告、記者発表

としたいと考えております。

発行予算については、琉球大学教育学部三大学連携事業の予算より発行いたします。初期発行100部を予定。CDとDVDのセットでの発行。

見本用の印刷については今後検討する。

- 3. 船浮校・白浜校における学校体験に関するとりくみ
- ・ 例年継続している運動会における学校体験のとりくみについて、受け入れ校の承諾を 前提に引き続き継続していきたい。
- ・船浮校は、校舎改築のため 6 月運動会実施予定であるため、その時期にあわせたとりく みとする。
- ・白浜校は、例年通りに運動会実施予定。
- ・鳩間校も教員より実施の要請あり。今後、校長先生と受入れが可能か調整をすすめる。

3. 総合学習教材・素材集「結びあうしま島」CD-ROM監修委員会

開催目的

2008年度、編集委員会のもとに改訂された「結びあうしま島」教材集の教材データに関して、監修を実施し教材集として完成させる。

開催概要

日 時:2009年3月12日(木)~13日(金)

時 間:13時00分~18時30分、9時00分~11時00分

場 所:竹富町教育委員会委員会室

参加者:監修委員会

(石垣久雄委員長)

(慶田盛安三教員委員)

(前上里徹教育委員会教育課長)

(里井洋一琉球大学教育学部教授:結びあうしま島編集委員)

(山口剛史琉球大学教育学部准教授:結びあうしま島編集委員)

議 題: 監修作業

結びあうしま島CD-ROM教材の編集過程の説明と活用等研修会のとりくみ報告教材監修作業

今後の発行計画と次年度事業計画について

次回結びあうしま島CD-ROM活用等研修会のとりくみ

その他

「結びあうしま島」教材集編集のスケジュールと 2009 年編集計画

はじめに

お集まりいただきありがとうございます。本日は、具体的な監修作業が主になりますが、これまでの経過をご報告させていただき、来年度の編集計画についてご提案させていただきたいと思います。監修委員会での編集計画(案)を確認したうえで、正式に教育委員会に 2009 年度にすすめる事業案として提案し、管内の小中学校への依頼・作業をすすめていきたいと考えております。

2009(平成 21)年度より3年間、琉球大学教育学部と沖縄県教育委員会は文部科学省から特別予算を受け、「学力」問題にとりくむことになりました。具体的には、「沖縄教育フォーラム」を立ち上げ、さまざまな角度から大学教員と行政・学校現場との協働による実践研究をすすめることになります。この事業はプロジェクト申請方式で、プロジェクトを結成し、予算申請し認可されれば、正式なプロジェクトとして予算もついて研究をすすめることができます。

「結びあうしま島」改訂作業も、本事業に予算申請し研修会に関わる旅費等を賄えるようにしたいと考えております。本改訂作業が、管内の先生方にとって地域教材を見直し、現在問われている学力観や授業力向上に少しでも寄与できるものになるように努力していきたいと考えております。以下具体的な経過と提案をさせていただきたいと思います。

「結びあうしま島」改訂の経過報告

2008年度は、教育委員会より管内の小中学校の先生方を編集委員として委嘱して、さらに琉球大学教育学部の里井・山口を加え、編集委員会を立ち上げ教材の改訂作業をすすめてきました。具体的には、6月13日に第1回研修会を実施し、編集委員の委嘱と担当分けを実施しました。第2回研修会は合宿形式で交流センターにおいて8月7日~8日に実施しました。合宿では、ごみ教材の改訂が大きな話題となり、翌日にはリサイクルセンターの見学を急きょ実施し、竹富町のごみ処理の実態を参加者みんなで学びました。第3回目は、最終的に各学校より改訂した教材を持ち寄り検証する場を設定しました。2月6日に実施された教材案をもとに教材の在り方、授業での活用方法にわたり、議論が出されました。具体的に3,4年の社会科の中でどのように教材を選択するのか、「結びあうしま島」を活用したモデルカリキュラムの必要性が出されました。各担当の先生の改訂作業については一定の改訂作業は終了しました。しかし、新城島や町全体の課題など、改訂に至らなかった教材もあります。引き続き、編集委員会を組織し改訂作業をすすめ、モデルカリキュラムの研究(実際に社会科授業の使い方)、研究授業を通じた実践研究ができれば、大きな財産になると考えられます。

2009 年度編集計画(案)

1D 編集方針

- 1 引き続きすべての教材に関して改訂作業をすすめる。
- 2 社会科モデルカリキュラムの研究を実施し、教材活用ハンドブックとして発行する 2D 具体的編集作業

昨年同様、年3回の研修会を中心に編集・研修を実施する。研修会は以下のような日程ですすめる。

第1回(6月開催) 編集委員の委嘱・編集計画の確認、模擬授業による研修

第2回(8月開催) 1泊2日の合宿形式による改訂案検討の編集委員会

第3回(2月開催) 改訂教材のチェック最終点検のための編集委員会

上記以外に、授業研究会、改訂教材を活用した研究授業などを実施できるよう調整する。

3D 編集組織ならびに監修委員会

1 編集委員会

各小中学校より1名を編集委員として委嘱する。可能な限り、本年度委嘱した委員 の継続をお願いする。

2 監修委員会

現在の監修委員会メンバーに継続し、監修委員として依頼したいと考えております。(敬称略で失礼します)

石垣久雄(委員長)慶田盛安三(教育委員・「結びあうしま島」初代編集長)慶田城久(教育長)前上里徹(教育課長)里井洋一(琉球大学)山口剛史(琉球大学)

6. 2008 年度島尻教育研究所連携事業活動報告

小林 稔

◇小・中学生の学校や日常生活に関する調査について

2007年度より島尻教育研究所では本学教育学部と連携し、島尻管内小中学校における児童生徒の日常生活や学習に関する実態を把握し、教育施策の策定や指導に資することを目的に教育に関するさまざまな側面に焦点をあてた調査研究を継続的に行っている。

この調査は、管内小学校 5 年生と中学校 2 年生を対象として小中学校を 2 ブロックに分け、それらブロックを毎年交互に調査する計画で行われており、2008 年度は調査実施の 2 回目にあたる。2008 年度における対象者学校数と児童生徒数は小学校 21 校(1431名)、中学校 12 校(1501名)であった。

調査内容は、授業以外での学習時間、睡眠時間や朝食摂取頻度、読書時間、テレビやDVDの視聴時間、携帯の使用頻度や通学方法、ならびに1週間あたりの運動時間などのライフスタイルに関する項目に加え、学校生活に関する認知・満足度、規範意識、授業の満足度と教科への興味、進路や将来への意識等28項目であった。これらの統計解析は主にクロス集計により実施した。昨年度と同様、調査結果は要約され、平成21年2月20日の沖縄タイムスに掲載された(下資料参照)。



資料1.沖縄県・市町村関係の各種委員一覧(平成20年度)

| | 氏 名 | 職名 | 兼 業 先 | 委 員 名 等 |
|----|--------------|---------|-----------|--|
| 1 | 浅井玲子 | 准教授 | うるま市教育委員会 | 「学ぶ意欲の育成・学びの姿勢の確 |
| | | | | 立」共同研究・指導助言講師 |
| 2 | 伊藤義徳 | 准教授 | 沖縄県教育委員会 | スクールカウンセラー |
| 3 | | | 沖縄県立総合教育セ | 平成20年度沖縄県適応指導教室「てる |
| | | | | しの」スーパーバイザー |
| 4 | | | 沖縄県 | 沖縄県自殺対策関係機関実務者会議委 |
| | 11 1 246 222 | - Lui 1 |) | 具 NATIONAL TO THE PROPERTY AND THE PROP |
| 5 | 井上講四 | 教 授 | 沖縄県立図書館 | 沖縄県立図書館協議会委員 |
| 6 | | | 浦添市教育委員会 | てだこ市民大学の運営委員会委員 |
| 7 | | | 浦添市美術館 | 浦添市美術館協議会委員 |
| 8 | 浦崎武 | 准教授 | 那覇市教育委員会 | 学習障害児等専門家チーム員 |
| 9 | | | 那覇市教育委員会 | 那覇市就学指導委員会委員 |
| 10 | | | 島尻教育事務所 | 平成20年度島尻地区専門家チーム会議 |
| | | | | 委員 |
| 11 | | | 島尻教育事務所 | 特別支援連携協議会委員 |
| 12 | 大城賢 | 教 授 | 沖縄県教育委員会 | イマージョン教育研究運営指導委員会 |
| | | | | 委員 |
| 13 | | | 浦添市教育委員会 | 浦添市英語推進委員 |
| 14 | | | 那覇市教育委員会 | 研究開発学校運営委員 |
| 15 | 大沼直樹 | 教 授 | 沖縄県立大平養護学 | 沖縄県立大平養護学校評議員 |
| 16 | | | 沖縄県教育委員会 | 平成20年度沖縄県教科用図書選定審議 |
| | | | | 会委員 |
| 17 | | | 沖縄県教育委員会 | 沖縄県広域特別支援連携協議会委員 |
| 18 | 緒方茂樹 | 教 授 | 沖縄県教育委員会 | 沖縄県発達障害者支援体制整備委員会 |
| | | | | 委員 |
| 19 | | | 宮古島市教育委員会 | 宮古島市就学指導委員会委員 |

| 20 | 緒方茂樹 | 教 | 授 | 沖縄県教育委員会 | 平成20年度沖縄県教科用図書選定審議 | | | | |
|----|-------------------|-----|----|----------------|-------------------------|--|--|--|--|
| | 1 THE 23 / 20 TES | 37 | ,, | | 会委員 | | | | |
| 21 | | | | 沖縄県教育委員会 | 沖縄県広域特別支援連携協議会委員 | | | | |
| 22 | 片岡淳 | 教 | 授 | 沖縄県教育委員会 | 沖縄県文化財保護審議会専門委員 | | | | |
| 23 | | | | 沖縄県 | 沖縄県工芸産業振興審議会委員 | | | | |
| 24 | 神園幸郎 | 教 | 授 | 西原町 | 西原町心身障害児童生徒適正修学指導 委員 | | | | |
| 25 | | | | 西原町 | 西原町幼稚園障害児保育実施会議委員 | | | | |
| 26 | | | | 西原町 | 保育所障害児巡回指導員 | | | | |
| 27 | | | | 西原町 | 幼稚園障害児巡回指導員 | | | | |
| 28 | | | | 西原町 | 通園デイサービス事業障害児巡回指導 | | | | |
| | | | | | 員 | | | | |
| 29 | | | | 沖縄県教育委員会 | 沖縄県心身障害児適正就学指導委員会 | | | | |
| | | | | | 委員 | | | | |
| 30 | 河名俊男 | 教 | 授 | 沖縄県教育委員会 | 沖縄県文化財保護審議会専門委員 | | | | |
| 31 | | | | 沖縄県教育委員会 | 「天然記念物緊急調査(サンゴ礁)」 | | | | |
| | | | | | に関わる調査嘱託員 | | | | |
| 32 | 金城昇 | 教 | 授 | 南城市 | 健康づくり推進協議会委員 | | | | |
| 33 | | | | 西原町 | 西原町健康づくり推進協議会委員 | | | | |
| 34 | | | | 西原町 | 西原町食と農の推進協議会委員 | | | | |
| 35 | 國吉真哉 | 准教授 | | 沖縄県 | 沖縄科学技術大学院大学周辺整備住宅 | | | | |
| | | | | | 専門部会委員 | | | | |
| 36 | | | | 宜野座村 | 宜野座村立学校建設検討委員会委員 | | | | |
| 37 | | | | 宜野湾市 | 宜野湾市公共事業評価監視員会委員 | | | | |
| 38 | | | | 那覇市 | 那覇市住宅政策等審議会委員 | | | | |
| 39 | 小田切忠人 | 教 | 授 | 那覇教育事務所 | 平成20年度教育施策に関する那覇地区 | | | | |
| | | | | | 協議会委員 | | | | |
| 40 | 里井洋一 | 教 | 授 | 沖縄県教育委員会 | 沖縄県文化財保護審議会専門委員 | | | | |

| 41 | 里井洋一 | 教 | 授 | 竹富町教育委員会 | 竹富町史編集委員 | | | | |
|----|-------|----|---|-----------|-------------------|--|--|--|--|
| 42 | | | | 沖縄県教育委員会 | 新沖縄県史編集委員会委員 | | | | |
| 43 | | | | 沖縄県選挙管理委員 | 沖縄県明るい選挙推進協議会の市民性 | | | | |
| | | | | | 教育副読本選定専門委員 | | | | |
| 44 | 島袋純 | 教 | 授 | 沖縄県選挙管理委員 | 沖縄県明るい選挙推進協議会委員 | | | | |
| 45 | | | | 沖縄市 | 沖縄市総合計画審議会審議員 | | | | |
| 46 | | | | 那覇市 | 那覇市議会史編集委員 | | | | |
| 47 | 島袋恒男 | 教 | 授 | うるま市教育委員会 | 「学ぶ意欲の育成・学びの姿勢の確 | | | | |
| | | | | | 立」共同研究・指導助言講師 | | | | |
| 48 | | | | 沖縄県 | 「教職員の勤務の実態や意識」に関す | | | | |
| | | | | | る分析検討委員会委員 | | | | |
| 49 | | | | 沖縄県立西原高等学 | 沖縄県立西原高等学校学校評議員 | | | | |
| 50 | | | | 沖縄県教育委員会 | 「高等学校におけるキャリア教育の在 | | | | |
| | | | | | り方に関する調査研究」事業における | | | | |
| | | | | | 調査研究組織委員 | | | | |
| 51 | 新城澄枝 | 教 | 授 | 沖縄県教育委員会 | 沖縄県スポーツ振興審議会委員 | | | | |
| 52 | | | | 沖縄市 | 沖縄市食育推進会議委員 | | | | |
| 53 | | | | 読谷村 | 読谷村食育推進会議委員 | | | | |
| 54 | 立石庸一 | 教 | 授 | 沖縄県教育委員会 | 沖縄縣スーパーサイエンスハイスクー | | | | |
| | | | | | ル運営指導委員会委員 | | | | |
| 55 | | | | 沖縄県 | 新石垣空港事後調査委員会委員 | | | | |
| 56 | | | | 沖縄県 | 沖縄県林道建設環境調査検討委員会委 | | | | |
| | | | | | 員 | | | | |
| 57 | 田中敦士 | 准教 | 授 | 沖縄県教育委員会 | 沖縄県発達障害者支援体制整備委員会 | | | | |
| | | | | | 委員 | | | | |
| 58 | 田原美和 | 准教 | 授 | 沖縄県 | 沖縄県金融広報委員会委員 | | | | |
| 59 | 田吹亮一 | 教 | 授 | 沖縄県教育委員会 | 沖縄県文化財保護審議会専門委員 | | | | |
| 60 | 豊見山和行 | 教 | 授 | 沖縄県教育委員会 | 沖縄県文化財保護審議会専門委員 | | | | |

| 61 | 豊見山和行 | 教 | 授 | 沖縄県教育委員会 | 新沖縄県史編集委員会委員 | | | | |
|----|-------|-----|----|-----------|--------------------|--|--|--|--|
| 62 | | | | 沖縄県教育委員会 | 沖縄県歴代宝案編集委員 | | | | |
| 63 | 花城梨枝子 | 教 授 | | 沖縄県 | 消費生活審議会委員 | | | | |
| 64 | | | | 沖縄県 | 沖縄県農政審議会委員 | | | | |
| 65 | 平田幹夫 | 教 | 授 | 沖縄県教育委員会 | スクールカウンセラー | | | | |
| 66 | | | | 浦添市 | 「子どものまち宣言」起草委員会委員 | | | | |
| 67 | | | | 浦添市立教育研究所 | 浦添市立教育研究所運営委員 | | | | |
| 68 | | | | 那覇市立城北中学校 | 学校評議員 | | | | |
| 69 | 廣瀬等 | 准教 | 效授 | うるま市教育委員会 | 「学ぶ意欲の育成・学びの姿勢の確 | | | | |
| | | | | | 立」共同研究・指導助言講師 | | | | |
| 70 | 真栄城勉 | 教 | 授 | 南城市教育委員会 | 南城市スポーツ振興審議会委員 | | | | |
| 71 | | | | 沖縄県教育委員会 | 沖縄県児童生徒体力向上推進委員会委 | | | | |
| | | | | | 員 | | | | |
| 72 | | | | 沖縄県教育委員会 | 平成22年度全国高校総体競技力向上推 | | | | |
| | | | | | 進本部協会員会委員 | | | | |
| 73 | | | | 沖縄県教育委員会 | 沖縄県サッカー競技場整備に関する調 | | | | |
| | | | | | 査・検討連絡会議委員 | | | | |
| 74 | 三輪一義 | 准孝 | 效授 | 沖縄県教育委員会 | 平成22年度全国高校総体競技力向上推 | | | | |
| | | | | | 進本部協会員会委員 | | | | |
| 75 | 望月道浩 | 講 | 師 | 沖縄市教育委員会 | 沖縄市図書館づくり懇話会委員 | | | | |
| 76 | | | | 西原町 | 西原町立図書館協議会委員 | | | | |
| 77 | 吉葉研司 | 准教授 | | 沖縄市 | 沖縄市活性化 100 人委員会委員 | | | | |
| 78 | | | | 那覇市 | 那覇市こども政策審議会委員 | | | | |
| 79 | 米盛徳市 | 教 | 授 | 浦添市立教育研究所 | 浦添市立教育研究所運営委員 | | | | |
| 80 | | | | 宜野湾市教育委員会 | 宜野湾市教育行政点検・評価審査委員 | | | | |
| 81 | | | | 宜野湾市はごろも学 | 宜野湾市はごろも学習センター運営委 | | | | |
| | | | | <u></u> | 員 | | | | |

平成20年度共同研究推進委員会名簿

| 部会・ワーキング | 共同研究 | 学部·附属 | | 地 域 | 貢 献 | 推進 | 部 会 | |
|-----------------|-------|-------|------|----------|--------------|------|------|------|
| グループ | 推進 | 学校共同研 | ÷17 | ı | フーキ: | ンググ | ループ | |
| 部会長·WG長 | 委員会 | 究推進部会 | 部 会 | NARAEネット | 竹富町 | 宮古島市 | 島尻 | 宜野湾市 |
| 専修・コース等 | 真栄城 勉 | 佐久間正夫 | 里井洋一 | 津田正之 | 山口剛史 | 緒方茂樹 | 小林 稔 | 里井洋一 |
| 教育実践総合 センター長 | 眞栄城 勉 | | | 0 | | | | |
| 国語教育 | 小澤 保博 | 0 | | | | | | |
| 社会科教育 | 里井 洋一 | 0 | 0 | | 0 | | | 0 |
| 数学教育 | 湯澤 秀文 | 0 | | | | | | |
| 理科教育 | 吉田安規良 | 0 | | | 0 | | | |
| 音楽教育 | 泉惠得 | 0 | 津田正之 | ◎津田正之 | | | | |
| 美術教育 | 上村 豊 | 0 | | | | | | |
| 保健体育 | 竹野 欽昭 | 0 | | | | | | |
| 技術教育 | 清水 洋一 | 0 | | | | | | |
| 生活科学教育 | 浅井 玲子 | 0 | | | | | | |
| 英語教育 | 大城 賢 | 0 | | 0 | | | | |
| 教育学 | 佐久間正夫 | 0 | | | | | | |
| 学校心理 | 道田 泰司 | 0 | | | | | | |
| 児童教育 | 上間 陽子 | 0 | | | | | | |
| 特別支援教育 | 緒方 茂樹 | | 0 | | | 0 | | |
| 日本語教育 | 髙橋美奈子 | | | | | | | 0 |
| 情報教育 | 仲間 正浩 | | | | 0 | | | |
| 生涯健康教育 | 真栄城 勉 | 0 | | | | | | |
| 島嶼文化 | 島袋 純 | 0 | | | ◎山口剛史 | | | |
| 教育カウンセリング | 服部 洋一 | 0 | | | | | | |
| 自然環境教育 | 小屋敷琢己 | 0 | | | | | | |
| 教育実践総合センター | 平田 幹夫 | | 小林 稔 | 0 | 小林 稔 米盛徳市 | | ◎小林稔 | 0 |
| 障実践センター | 浦崎 武 | | | | | 0 | | |
| | 赤嶺 智郎 | 0 | | | | | | |
| 附属小学校 | 仲嶺 盛之 | | | | | | | |
| | 押川 信一 | | | | | | | |
| | 比嘉 俊 | 0 | | | | | | |
| 附属中学校 | 得能留美子 | 0 | | | | | | |
| | 古庄 清宏 | | | | | | | |
| 事務部 | | | | 事務長 | | | | |